

---

# 桜の散る夜に

八神智和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜の散る夜に

### 【Nコード】

N2391N

### 【作者名】

八神智和

### 【あらすじ】

「つまんない」

頭脳明晰、容姿端麗、完璧超人、かみやたくみ神谷拓海。

何にも興味を示さなかった彼が一人の少女に興味を示した。

「お前、いい加減にしろよ!!」

あきかわさくら清林高校生徒会長、真面目で努力家、秋川桜。

夏休みを控えた一週間。彼女は地獄を体験した。

高校二年生の七月。とある田舎街での物語。

物語のキーワードは『クイーン常闇の女王』。その覚醒に伴い、物語は始

まる。

設定をいろんなマンガ、小説を参考にしているので注意が必要です。クロスオーバーや二次創作ではないのでかなりめっちゃくちゃなものになるかもしれません。少しでも楽しんでいただければ幸いです。かなりの遅筆になると思うので勘弁してくださいね

## 「プロローグ」

### 「プロローグ」

あきかわ さくら  
秋川 桜。

彼女と初めて出会ったのは、高校一年生の冬。

いや、もしかしたらもつと前から会っていたかもしれないし、もつと前に知り合っていたかもしれない。

ただ俺、神谷拓海かみや たくみが初めて彼女を意識したのは少なくとも高校一年生の冬からだということ。

秋川はなんというか、今時珍しく元気な女の子で、男勝りって言っても過言じゃないくらいに凄かった。

勉強はいつもトップクラス。足だって男の子より速くて、運動もびつくりするくらい出来る。

容姿端麗でスタイルは……… ちょっと胸に抵抗があるかな。

で、一番凄いのはこれが才能とかじゃなくすべて努力だったことと、言ってもそれは聞いた話なんだけど。

何事にも努力をしない俺と違って彼女は何事も努力をする天才らしい。

そんな彼女のクラスでの立ち位置はいわゆる『委員長』。

なんであろうと彼女に任せれば大丈夫なんて言われるほどに、秋川桜は人望があり、同時に仕事が出来た。

世話焼き屋の、お節介。大きなお世話に、余計なお世話。やること全部に真剣で、やること全てに努力する。

しかし、彼女には苦手なものがあるらしい。

男。

女とは異性となり、女とは異なる人間。女子高校生が一番興味を持ちそうな恋愛に、必要不可欠な男子という存在を彼女は苦手らしい。

いや、苦手っていうのは間違ってるかな？

苦手と言うより大嫌い。

近づけないではなく、近づきたくない。喋れないではなく、喋りたくない。触れないではなく、触りたくない。

そして、それを隠せない。女子に優しく、男子に厳しい彼女の行動はかなり反感を買っていたようだね。

本人は、できるだけ平等にと心がけているようだけど、うまくできてはいないみたいだ。

友達を作らない俺が言うのもなんだけど、彼女には男友達がほぼと言っていいほどいないらしい。

でも、そんな話を他の男子が話しているのを聞いて、俺が秋川桜に興味を持ったわけじゃない。

だいたい、同じクラスだったし、そんな噂程度にはまったくと言っていいほど俺は関心がなかった。

前に『彼女に初めて出会ったのは』って言ったけど、それは間違いで、お互いに高校に入ってから知り合い程度には面識があった。

でも、俺は個人的に『初めて出会ったのは』と言いたい。

冬。

彼女と席が隣になった俺は、彼女に『出会った』。

びっくりだよ。

俺が教科書を忘れたから見せてって言ったらさ、なんて言ったと思う？

『お前いつも授業真剣に受けてないだろ。私の隣に来たからには真剣に授業を受けてもらうからな』

だってさ。

これを真剣な顔で言われたんだよ。

本当に面白かったな、あのときは。

だって、俺に付きつきりで授業受けてるんだもん。

良く見る下心丸出しの女じゃなくて、俺のことを一人のクラスメイトとして見てくる女なんて珍しい。

そんな彼女だから、興味を持った。

そこらへんの男子とか女子とか、どこにでもいそうな先生とかじゃなくて。

彼女にだけ、興味を持った。

でもま、一年の冬に興味持ったところですぐに二年になっちゃってね。

クラスは離れて、もう接点はなくなっちゃってさ。わざわざ、秋川にちよっかいだして、からかうことも出来なくなっちゃったんだけど。

ここからが本当に面白いところ。

彼女ね、二年生のうちに生徒会長になった。

まあ、会長と言っても、選挙にあまり関心の無い我が高校、清林高校は会長に立候補したのが秋川しかいなかったから、実質意味のないものなんだけどさ。

会長になってからが、彼女の凄いところ。

学校の改革を始めた。

読書週間とか、清掃週間。朝の清掃に挨拶運動。生徒の着衣の乱れを改善し、お堅い高校へと様変わり。

そんなことをすれば苦情が来るのはあたりまえ。自由な校風が好きだった男子達とは完全に対立するという状態に陥ったんだけど、その時の解決方法がまた面白い。

『黙れ』。

その一言。鬼のような形相でそう言って、多くの男子を黙らせた。そこからの秋川のおだ名が『鬼の生徒会長』。

なんか、護身術を習ってるらしくて色々強いらしいし、怒った時の顔の怖さからそんなおだ名がついたみたい。

私立なんだから、そんなに頑張らなくてもいいのに、って思いながらも俺はそれを見つめていたんだけど。

そこで俺はさらに、彼女に興味を持った。

一つだけ、凄いものを見たから。目を奪われたから。彼女が俺に

一度だけ見せた、笑顔がとてもきれいだったから。

そうだ、ここで一つ訂正しておこう。最初に秋川のことを『容姿端麗』って言ったけど、それは俺の主観かもしれない？

だってさ、そう思っちゃったら止まらないじゃない？

勘違いしないように言っておくけど、これは『恋愛感情』じゃない。

これはもはや、『独占欲』だ。

そして、運命は動き出す。

夏休みを控えた一週間前。俺は秋川桜と、忘れられない三日間を過ごすことになる。

## 「プロローグ」(後書き)

たぶん、これで主人公が誰をモデルにしているのかわかる人が居る  
かもしれませんね

出来れば、感想・批判をよろしくお願いします

夏休みを一週間後に控えた、我が清林高校は毎日がお祭り騒ぎだ。バイトに恋愛、思い出作りに家族と旅行。聞いた話では、友達だけで旅行に行く奴らもいるらしい。

家が貧乏な私にはとても羨ましい限りだが、恨み事を言っても何も変わらないことは分かってる。

夏休みの私の計画なんて、ほとんどがバイトと勉強だ。遊ぼうと思ってもお金がないし、第一に暇がない。

今期の生徒会長となった私、秋川桜には夏休みを控え生徒会の仕事に追われていた。

学校改革。美化強化や、読書週間。それらを専門にする委員長に任せればいい話なのだが、自分が提案した仕事を一斉に押しつけてしまっただけはそいつに悪い。

夏休みにも学校に来てやらなければならない仕事があるから、ほとんど遊びになど行けないだろう。

あ、勘違いしないように言っておくけど友達がいらないわけじゃない。

本当に暇がないんだ。

「ったく……この多忙さだけではどうにかならんものか……」

と、学校の通学路、自転車通ではない私が歩きながら呟く。

周りには高校の制服を着ている生徒たちがいるのだが、生徒たちは全て私を見ては目を逸らしているようだ。

確かに私は男子を一人で相手出来るほどの人間だろうか。

……私はそこまで怖いことをしただろうか。

「なんだその顔。現生徒会長は前生徒会長より、よほど多忙に見えるな」

不意にそんな声を掛けられた。聞き覚えのあるその声。去年、私

が一年生の時に大変お世話になった先輩の眠そうな声。

そちらを見ると、案の定『前』生徒会長、月城先輩が私の隣を歩いていた。

「わっ、珍しいですね、月城先輩。こんな朝早くから学校に来られるなんて」

いつもなら、遅刻ギリギリに校門に走ってきているのに。

「いや、あれだ。夏休みが待ちどおしくてさ、いつもより早く起きちゃった」

なんですかそれ、と笑うと月城先輩は恥ずかしそうに「笑うなよ」と返した。

つきしろうちあき  
月城千秋。

私が生徒会長に就く前の生徒会長。会長の引き継ぎのために一週間ほど仕事を手伝ってもらったときに親しくなった。

先輩はなんというか……バカだ。

成績は中の下だし、特技なんてない。運動も出来るほうかと問われれば十人の内十人が首を横に振るだろう。

顔立ちは……まあ、ひいき目に見ても中の上。普通と言ったら普通だし、イケメンと言ったらイケメンだ。

でも、ぼさぼさな黒髪に、眠そうな眼がそれらのプラス要因を全て阻害してしまっている気がする。

けれど、これでモテるのだから、たまったもんじゃない。

そんな先輩が生徒会長になるときは、立候補者が先輩も含めて四名も居たらしい。

それら一人一人が何かにおいて大きく秀でていて、全員の内誰が会長になってもわからないとまで言われたって話を先生に聞いたんだけど（先生が誇張しただけかもしれないけど）。

月城先輩はそれらに圧倒的な差をつけて当選した。

私の時は一人だけだったのに、先輩の時は四人つてのを聞くと、何か釈然としないのだがここでは関係のない話だ。

四人のそれぞれのスキルはこんな感じ。

まず、一人目。

その人は頭の良さに大きく秀でていたらしい。順位は常にトップ。誰もが認める学年主席。

二人目。

その人はずばぬけた体力に秀でていたらしい。いくつかの部活を兼部し、すべての部活で好成績を収めたそうだ。

三人目。

その人は冷静な頭脳。的確な指示でクラスをまとめ、大きなリーダーシップを持ち合わせていた。

そして、四人目。

月城千秋その人の圧倒的な戦力。

それは『人望』だ。

人当たりのよい性格からか、気軽な雰囲気からか、先輩は人に好かれる。

巧みな話術か、優しい性格か、はたまた他の理由かはわからないがそれこそが先輩の凄さ。

そんなこんなで、月城先輩は他に圧倒的な差をつけて当選したらしい。

最初に『モテる』と言ったが、それは外見ではなく、そんな先輩の内面に惚れている。

って、友達が言ってた。

なにやら、『あのやるときにはやってくれそうなところがいいよね』とかなんとか言ってた気がするけど

よく、わからないや。

「んで、現生徒会長秋川桜さんは、いったい何の仕事がたまっているんですか？」

先輩が言う。

眠そうに目を擦りながら言う辺りが先輩らしいと言えらしいのだが、ちよつと失礼な気がするな。

「なんでも、ですよ。先輩も知っている通り私は学校改革を短期間

の内に実行してしまったので、そのぶんのツケが今になって回ってきているだけです」

「へえ〜 そうなんだ」

あ、コイツもう興味失ってやがる。

尊敬してはいるのだが、どうにもしつくりこない人だ。

「お、そう言やさ。お前、今朝のニュース見た？」

「は？ ニュースですか。いえ、今日は天気予報しか見てません……」

……何か先輩の興味のあるような楽しい話でもあったんですか？

「そう露骨に嫌そうな顔するなよ。この事件は俺の直感がヤバいと告げてるんだぜ」

「はあ……直感、ですか……」

そんな、直感を自信満々に言われてもなあ。

この先輩の直感って、外れそうだ。

「事件っていうと……もしかして、殺人事件とか言いませんよね」

「お、いいね〜その推理。でもちよつと違うかな                      これは

殺人と言っているのか疑問だから」

「へえ〜 そうなんですか」

「ってオイ！！    なに興味なさそうな顔して先に行ってたんだよ！！

これから先輩の忠告をしてやろうってのに無視はねえだろ、無視は……」

……この、人いちいちオーバーアクションだよな。

チカンとかだったら、私はあまりスタイルの良い方じゃないし、可愛くもないだろうから襲われる心配はまずないだろうし。

暴力的な事件だってそうだ。正直、襲われても返り討ちにする自信がある。

「良いから聞けって。損はないから」

「でも先輩、遅刻しますよ」

「良いから……」

………？

月城先輩は何を焦っているんだ。

いつもと違って随分と必死だけど。

「その事件つてのな　死体が妙らしいんだよ」

「……………妙、と言うと？」

「いやさ…………死因が、わからないんだと」

…………死因？

死んだ原因と書いて、死因。

餓死、焼死、水死、病死、窒息死、感電死といった死因。

それらの死因がわからない、と先輩は言う。

「まあ、どうせ検死の失敗か何かだろうけどな」

そんな先輩の言葉に「でしうね」と適当に返しながら、私は何か気持ち悪いものを感じた。

胸の中に、違和感が残る。

「……………クソッ」

その違和感を振り切るかのように私は学校への足を速めた。

とある、廃墟ビル。辺りは整備されていないため草がぼうぼうと生え、人間が入るのを拒絶するかのように忽然とそこに立つ。

五十メートルも行けば真新しい建物が多くあるというのにここだけは、時代に取り残されていく村を彷彿させる風景画のようだった。中は外観から予想できるように、補修などされているはずもなく、壊れたコンクリートの破片や、割れた窓や鏡、破損した扉など幽霊スポットに指定されそうなものが転がっており、まるで映画の撮影場のような独特の雰囲気漂っていた。

「ふむ…………ここかな」

そんな人の出入りが皆無であろう場所に一人の男が居た。タキシードのネクタイを緩め、目を閉じているのではないかと言うほど細めている男。

彼のかもし出す雰囲気は、言わば『場所そのもの』だ。この古い建物ならば、そこにあってもおかしくない雰囲気へと、近くの真新しい建物ならば、そこに居てもおかしくない雰囲気へと。それは、話しかけられず、意識されず、そこに居ることが当たり前前の正常であつて、異常な状態。

説明不可。証明不可能。原因不明。そんな『能力』が彼の周りには働いていた。

「さてさて、聞いていた以上に事態は危ない状態なのかな？」

呟くような独り言。それでいて、何かに話しかけるような独り言。そして、その独り言に答える声があつた。

クイーンみつけ！！ クイーンみつけ！！ 『教会』の敵にして絶対なる守護神、クイーンを見つけた！！ ヒヒッ、ヒヒヒ

甲高いようできて、異様に聞き取りやすいその声は一度フィルタ―にかけられたかのようにかすれている。

周りに男以外の姿は無いというのに、その声はあたりに響く。男は、その声を気にせずに独り言を続けた。

「……ん、これは随分とまた……クスクス」

キングとクイーンの邂逅が、新たな災いを招く！ 災い災い！！ 神の子の再来！！

と、男はタキシードの胸ポケットから一つのチョークのようなものを取り出した。

それを振るいそこらかしこにある柱や地面に走り書きをしていく。『字』は力を表し、『記号』は範囲を示す。各々の働きを働きで埋め、各々の働きを『字』で固め、各々の働きを『記号』で形作る。神の子の再来は、秩序を乱す！ 秩序を乱すは悪魔の仕事！ されば神の子、悪魔と同じ！！

『色』は黒混ざりの白。灰色に似て、灰色とはまた違うこの色が意味することは、秩序。さあ、動け。己の秩序を持ってして私のために存分に働くのがお前の仕事だ」

魂ト引キ換ヘニ、三ツノ願ヒヲ叶ヘテヤラウ

「片目の悪魔は、そう言った」

そして、物語が始まる。

一人の少女と一人の少年は互いの運命を知りもせず、物語は第一章へと傾き始めた。

## 第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

1 (後書き)

..... 稚拙な文章で申し訳ありませんよ

## 第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

2

月城先輩と別れ私は、掃除をしながら挨拶運動を校門で行っていた。

「おはようございます、会長」

「ああ、おはよう」

「おはようさん。会長様」

「おはようございます」

「おはよう、秋川さん」

「おはよう」

「ちーす」

「ちーすじゃない！！　なんだその格好は。もう少し考えてから学校に來いと何度も言ってるだろ！！」

三者三様の挨拶は学年の違いや、男子女子の違いからくるものだ。三年生は、正直一番問題が多かったから厳しくあたったところ随分と私は先輩からは恨まれているらしい。

髪なんか染めてきたら、すぐに帰宅させてやるって公言したらびつくりするぐらい苦情が来たのはまだ記憶に新しいよ。

まあ、それでも今では結構減ってきたから意味が無いってわけじゃないさそうだけど。

「おっはよう！　桜！」

「うわっ、なんだびつくりした。楓か……いきなり跳びつかないでくれよ。心臓に悪い」

「ハハハ。ごめんごめん。でも、桜の足腰って強いんだね。いくら私くらいの小ささでも抱きつかれたら少しは態勢を崩すと思うんだけど」

「日ごろから鍛えてるからな」

「アッハハハ、桜カッコイ」

楓が私の身体から手を離し、胸の前で手をパチパチと鳴らした。

こんな無邪気な笑顔を見せる知り合いはそうは居ないから、何故か癒される気がするよ。

「そう言えば桜さ、今日は数学の小テストだよ！　まずいよ、勉強してないよ」

「またか……日ごろからしてないからそんなことになるんだ」

「ふう……私は桜みたいになら全部に全部、全力投球は出来ないの。まあ、桜の方が私よりもっと忙しいのにこんなこと言うのもなんだけどね」

「やりがいはあるから良いんだよ」

「……………おススメはしないけど。」

「ほら、楓。はやく行かないと遅刻するぞ」

「え……。桜は？」

「私はまだやることがあるからもう少し残るよ。今日の一時限目はなんだったっけ」

「確か、物理じゃなかったかな」

物理と言えば、伊藤先生か。あの先生なら少し遅刻してもうるさくは言われないだろう。

体育の先生とかは本当にうるさいからな。

「じゃあまた後でね、桜！　数学教えてよ」

私は、はいはいと言いながら楓が走っていくのを眺めて、見えなくなってから校門の方へと身体を向けた。

朝の挨拶運動に付き合ってくれた他の専門委員長を先に行かせ、私は正門の方へと歩く。

「いつも御苦労だな、秋川。先生も助かるよ」

「いえ、大したことじゃありませんよ」

毎日のように繰り返される先生からの労いの言葉に、いつもの返答をして、私は正門を閉める。

「待て待て待て待て！！　会長！　ちょっと待っ」

「遅刻だ」

と、息切れぎみに走ってきた男子が閉められた門の向こうで、嘆

いているのを黙殺して、私は掃除道具を片付けに倉庫の方へと足を向けた。

腕時計を見る。HRが始まるまで後十分ってところだ。充分間に合うだろう。

「この鬼会長オオオオ！！ 十秒くらいサービスしてくれたっていいじゃねえかー！！！」

なんだ、負け犬の遠吠えが聞こえる。十秒をバカにするからこんなことになるんだ。

去年よりずっと綺麗になった倉庫までの道のりを歩きながら、私は汗を拭う。ああ、そう言えば今日の最高気温は36とかお天気お姉さんが言ってた。どおりで暑いわけだ。

「それにしても、夏休みまであと一週間か……さて、何のバイトにしようかな……」

実は、いまだに夏休みにするべきバイトが決まっていない。タウワークを見てはいるのだが、あまり条件が良い店がないんだよね。やっぱり、条件の良い店ってのは夏休みの一カ月くらい前には全部埋まったりするんだろうか。理想的なのは、時給が出来るだけ高いところがいいんだけど……どうにも見つからない。

そりゃ稼ごうと思えばいくらでも稼げるかもしれないけど、私は生徒会の仕事がある。家のことだって少しは手伝わなくてはならないし、やることは結構あるのだ。その合間を縫ってバイトをするんだから、それほど長い時間も取れないだろう。

肉体労働系の仕事ならば、短時間で難なくお金を手に入れることが出来るが、親に反対された。身体が持つかどうか心配らしい。やれる自信はあるのだが 親は頑として首を縦には振らなかった。そう言えば、妹にも反対されたっけ。

「はあ……」

思わずため息を吐きながら、倉庫へとたどり着いた。扉を開け、多くの竹ぼうきやチリ取りがあるのを確認して、背中から、

「会長。こんなところで何やってるの？ 遅刻するよ」

と声を掛けられた。

急なことに、思わず倉庫の中に突っ込みそうになるのを堪えて、振り向く。

その時には、私はすでに声の人物にアタリを付けていた。私が生徒会長になってからというものの唐突に声を掛けるようになってきた人物。聞き覚えがある　　ではすまないほどに耳にこびり付くその声

「もしかして、誘ってるの？」

そんな甘ったるい声を耳元でささやかれて、私は自分の予想が当たっていることがわかった。

私の後ろに立ち、まるでキスするかのように密着し、耳元でささやいてくる変態男　　神谷拓海がそこに居た。

「ッ！！　離れろ！！」

ドン！　と神谷の身体を手で押し、身体を離して、私は充分に距離をとる。この変態は、何をしでかすかわからん。

「酷いな〜会長。これは俺なりのスキンシップだよ」

「違う。これはれっきとした犯罪だ。チカン行為だ！」

「？　俺は胸とか揉んでないよ」

「黙れ！　お前のチカンへの知識はいつたい何なんだ！？」

「俺の一番したいことこそが　　チカン？」

何を言ってるんだコイツは！？

ていうか、今コイツさりげなく「お前の胸が揉みたい」って言わなかったか？

「え〜。さくちゃんエッチー、何？　揉んでほしいの」

「アホか！！　あと、『さくちゃん』っていうのやめろ！！」

「じゃあ、『あきちゃん』」

「言い方の問題じゃなくて、どうしてお前にそんな親しげに名前を呼ばれなくちゃいけないんだ！！」

「そうケケチしないですよ、会長。ホント、可愛いな〜」

何を白々しい。お前はいつも私をからかって遊んでるだけじゃな

いか。

お前はつくづく気持ち悪い。

「つつか何やってんだ、お前。もうすぐ授業始まるってのに、何でこんなところに居る」

「いや、校舎に入ろうとしたら、こっちに行く会長の姿が見えたから」

「付いてきた、と？ ほほう、まるでストーカーのようだな」

「勘違いしないでね、会長。俺はストーカーだよ」  
肯定しやがった。

「頼むから私以外にこんな意味のわからないことをしないでくれよ」  
もし、他校の生徒をストーカーして捕まったりでもしたら、清林高校の信頼はガタ落ちだ。

「それって、『私以外の女は見ないで』ってこと？」

「そんな訳があるか。他人に迷惑を掛けるなって言ってたんだよ」

えー、と半眼で呟く神谷の隣を抜けて私は校舎へと歩き始めた。  
隣には何故か当たり前のごとく神谷が歩く。

まさか、神谷がこんなやつだったとは……一年の時にはまったく気付かなかったぞ。

「そうだ、ゲームしない？」

「断る」

「…………、あきちゃん酷い」

コイツッ！

「だから、その呼び方はヤメロって言ってるだろうが」

「じゃあ、なんて呼べばいいの？」

「…………、」

あれ？ なんて呼ばせればいいんだ。……さん付けか？

「秋川さ……」

「やだ」

即答された。

「じゃあ、お前は何が呼びやすいんだ？ あ、勿論さっきのやつは

ナシだからな」

「俺？ ふうーん。何かな……」

顎に指をあて考える神谷。そんな真剣に悩むことでもないだろうに。

「お、そうだ」

と、自分の手のひらに、拳をポンと当てる。

なんか、その……言いくいんだけど、正直、その表現は古くないか？

そんなことを思う私を尻目に、神谷は口元をニヤニヤさせながら、こう言った。

「さくらチン」

「ふっざけるなー!!」

なんだ、その名前だけで捕まりそうな響きは。明らかに、男子が女子につけるあだ名じゃないじゃないか。しかも、なんだ最後のは!! 私宇宙人か何かなのか!?

「お前に聞いた私がバカだったよ」

「そう文句ばかり言わないでよーさくらチン」

「お前、学校でその呼び方は絶対にヤメロよ」

「じゃあ、さくらチン」

問題の論点が明らかに間違っているッ!!

発音が変わっただけだ。ギターがうるさいならピアノみたいな感じ。

「ん。会長、一つ言い忘れてたんだけどさ」

神谷が申し訳なさそうに、そう言った。珍しいな、コイツがこんな顔するなんて。

「この時間が楽しくて言うの忘れてたんだけどさ      もうチャイム鳴ってるんだよね」

「      ツ!!!!???」

この日。私はこの学校で初めて、  
一時間目を遅刻した。

これからのお話をするにあたって神谷拓海という男について話をしなくてはならないだろう。

正直な話、なんであんな男の話を私がしなくてはいけないのかとも思うが、必要ならば仕方ない。

友達を作らない孤立無援の一匹狼、神谷拓海。

私のことを軽々しく、『あきちゃん』などと呼ぶあの男を一言で表すと『天才』だけで事足りるだろう。

何もかもが『天才』。容姿も頭も、身体も、全てが才能だけで事足りるなんていう努力と言う言葉を根底からバカにするような男。まずは、容姿の話からだろうか。天性のものを持っているらしく、あの男は異常なまでに異性にモテる。

強調するが、異常なまでに、だ。私を知るだけでも一週間に一度は告白されている。

一週間に一度。しかも、私を知る限りだからもつと告白している人は居るかもしれない。

一年間に換算すると、単純計算で四八人。学校の女子の何割に相当するかなど、考えるのがバカらしくなる。

私が言うのもなんだが、女心というものはよくわからないな。

で、神谷拓海はその告白を例外なく断る。誰一人として、OKを出すことがない。

さつさと女でも作れば告白も減りそうなものなのに、あの男は絶対に告白されても首を縦に振らないのだ。

どんな美女でも。どんな悪女でも。どんな女でも、だ。恋愛を命とする女子生徒の願いを、一つも受け入れずに断り続ける。

そんなことを一年間も続ければ、自然様々な噂が流れてくるものだ。耳を疑いそうになるものや、正反対の噂が同時に流れることもざらだ。

実際、生徒会長と言うある意味で噂の入りやすい位置にいる私は、かなりの量の噂を耳にしている。

実は年下が好んで、中学生以上に興味がない、とか。どこかの人妻と激しい恋愛をしているから、学校なんて言うちんけな場所での恋愛に興味がないとか。

女とは付き合えない理由があるとか、女にはすでに興味がないとか。

どれもこれも根拠のない、根も葉もない噂。話半分、面白半分で聞く分には面白いかもしれないが、真剣に聞く話ではないだろう。

噂は噂。本人との関わりがなければその事実はわからないのだから、他人との関わりを持つとうとしない神谷拓海にそんな噂が立つのは当然の結果でもあるのかもしれない。

事実、去年の冬まで一度も神谷拓海と話したことのなかった私は、あの男のことをただの超人としか思っていなかった。

ただの超人、というのもまた往々にしておかしな言い方だが、そうとしか言いようがないのだから仕方のない。

容姿端麗、頭脳明晰、冷静沈着。運動神経抜群の天才。少し一人の好きなクラスメイト。

今、思えば愚かしいことだが、私は神谷拓海のことをそんな曖昧なものとして見ていた。

まあ、同じクラスではいたが一度も話したことのない男のイメージなんてものを、明確に正しく表すことなど無理に等しいことなのだろうが。

しかし、一度も話したことがないのに、小さくともイメージを持っていた理由はひとえにその異常さ故だろう。

二、三年生は知らないが一年生の私たちの中（現在は二年生となるが）で、有名人と言えば自然と神谷拓海の名前が挙がってくるぐらいに知名度が高かった。

入学から一年たった今ならば、生徒会長の私と同じくらいの知名度をほこっているかもしれない。

学校と言つ社会からある意味隔離された空間でしか通じないものと言つ事を考えると大したことのないように思えるが、その学校内だけでも『誰でも知っている』というのは自慢してもいいほどだろうと思う。

有名になつていく過程は知らない。同じクラスということもあり、神谷の姿を普段から見えていたから気付かなかつたのだろうが、いつの間にか有名になつていたのだ。

そんな有名人と、初めてまともな会話をしたのが去年の冬。席替えをしてたまたま神谷拓海の隣だつたという不運な出来事が私の身に起こつてしまった。

いや、『不運な』というのは違つかもしれない。

ここで彼と出会つていなかつたら今の私はここに居ないのかもしれないのだから。

けど、『幸運な』というのも違つかもしれない。

彼との出会いもなければ、私は普通の学生で居られたのかもしれないのだから。

でも、そんなことを今更言つても意味もないし、変わりはない。あのときこうすればよかった、なんてことを悩んでも過去は変わらない。

意味がないなんてことを言つつもりはないが、それを繰り返して『次』を失うわけにはいかないから。

さて、話を戻そう。席替えをして、私が神谷拓海の隣の席になつた時。

その時気付いたのだが、神谷拓海は相当な面倒くさがり屋のようだ、ということだ。

テキストはいつも学校に置いてるし（ちなみに全教科だ）授業中に当たられても『わかりません』。

授業への興味をなくせばすぐさま空でも見てるし、授業が終われば、すぐに学校から去る。

他人から話しかけられても適当な相槌しか打たない、なんとも友

達甲斐の無い男だった。

初めて会話した日、神谷拓海は、何の気まぐれか、テキストを家の持って帰ったらしい。それをそのまま家に置き忘れたため、テキストを私に貸してくれと頼んできたのだ。

今、思えばこれが神谷拓海が私にちょっとしたいを出してくるようになった理由なのかもしれない。

普通に考えれば、テキストを貸した程度で相手が自分に興味を持つなどと考えることもしないが、これ以外に思い当たる節がないのだ。

命を救うとか、二人して危機的状況に陥るとか、そんなドキドキイベントに遭遇したわけでもなく、神谷拓海はこの日を境に私にちょっとしたいをだしてくるようになった。

そのちょっとしたいと言うのも、誰か他の人が居る前ではなく、何故かいつも二人きりのところである。

帰り道に回り道されてたりしたこともあったな。あれはもうストーカーだ。恐らく、訴えればこちらが圧勝できるだろう。

圧勝と言えば、神谷拓海は何事においても圧勝らしい。らしい、という表現の理由は圧勝の種類の噂が多すぎてすべてが真実かどうか分からないのだ。

スポーツや勉強といった健全なものから、果てにはケンカや賭けごと等という不健全なものもたくさんある。

一度だけ、友達に連れられ神谷の授業中の運動を見たことがある。率直な感想は、対戦相手が可哀そうだった。

抵抗できないほどの圧倒的实力。バスケはダンク。サッカーはオーバーヘッドといったトンデモ技がころころころ飛び出してくる。

と言っても、出場する時間は五分にも満たずすぐに退場してしまったが（恐らく、面倒なのであろう）、それだけの短時間でも神谷拓海は仲間チームの大きな助けになり、相手チームの大きな損害になっていた。

一瞬、人間ではないと思うほどに、アイツは常軌を逸してる。勉強についてだって、試しに『どうやって勉強しているのか』と聞いたら『勉強しなくても点数取れるからしてない』と返された。授業さえ聞いていれば、理解は出来る、なんて今時誰も言わないであろうことを平然と言つてのけやがったから、思わず殴りかかりそうになった。

そんな私を神谷拓海はからかつて遊ぶのだ。「あきちゃんは可愛いね」なんて馬鹿げたことを言いながら、話しかけてくるのだ。

そうだ、ここで一つだけ確認しておこう。

アイツは私にその気にさせるようなセリフをいつも吐いているが、それは心からの言葉じゃないことなんて私にはわかってる。

勘違いなどしていない。アイツは私をからかつて遊んでいるだけだ。そんなこと自覚している。

だからこそ、私はアイツのことが嫌いだ。

軽薄そうな、あの男のことが大嫌いだ。

あの変態ストーカー男を見るだけで、殴りたくなる。

それでも、いつかは終わると我慢していた。それだけで時間が問題を解決してくれるのだから。

それでいいと思っていた。

私は、それでいいのだと思っていたんだ。

あの男は、いつかは私から離れてくれると、思っていたんだ。

ああ、最後に言っておこう。

これからお話しする物語は『バッド』エンドだ。

結果、何かを救えるのかもしれないけれど、少なくとも私にはこの物語が『バッド』エンドだと思える。

救えるのは、私か、それ以外の誰かか、世界か……………神谷

拓海か。

これの中のどれかを救えたところで、私にはとても『ハッピー』  
エンドなんて思えない。

『ハッピー』のために誰かが犠牲になるなんて私は認めない。

だから、この物語は『バッド』エンドだ。

どこかのヒーローが助けに来てくれるような。

誰もが望む『ハッピー』な終幕を迎えず。

とことん、絶望の広がる『バッド』エンド。

それが、終幕へと歩く、私が言える唯一のことなのかもしれない。

靴箱を開くと、そこには見慣れたものが置いてあった。

便箋が入っているであろう封筒が、ハートマークのシールで綴じ  
られている。　　いわゆるラブレターだろう。

ラブレターを貰った。

内容はあるきたりな文章で、簡単に言うと昼休みに屋上に来てほ  
しいとのことだった。

「……………」

少し茶色の入る髪に、色素の薄い瞳を持つ少年　　神谷拓海は

そんな手紙を貰ったという事実に眉ひとつ動かさずにただ無言で反  
応した。

手紙を封筒の中に入れて、そのままバックに入れる。　　少しぐちゃ  
ぐちゃになってしまいう気もするが知ったことではない。

正直な話、面倒だ。

隣を見る。

さつきまで、会長が隣に居てくれたというのに、ラブレターが入  
っていることに気付いた秋川は『私が内容を読むわけにはいかない  
だろ！　もし読んでも捨てるなよ！　ましてや、約束の場所に行っ  
てやらないなんてことしたらぶっ飛ばすぞ！！』という物騒な言葉

を残して教室へと向かってしまった。

「……………つまらないな」

もう少し、嫉妬の色を見せてくれてもいいのに。

そう思いながら、神谷は自身の教室へと足を向けた。上履きに履き替え、前より少し綺麗になった床を歩く。

ちなみにもう授業の始まりの鐘は鳴っている。

秋川が急いでいた理由はこれなのだが、神谷にとっては授業より秋川との時間の方が大事のため、その時間を邪魔された鐘に理不尽と理解しながらも少々怒りを募らせていた。

そんな状態で授業に間に合うように走る気も起きず、ただゆっくりと歩いて教室へと向かっているのだ。

一年の教室の隣を通ると、数人の女子がこちらを見つめてきた。極力目を合わせないようにして、気付かないふりをしておく。

「あつっ……………」

少しだけ、ネクタイを緩める。

あまり緩めすぎると秋川が怒って相手をしてくれなくなるので、ほんの少しだけ緩める。

夏休み前だからなのか、今日はかなりの気温の高さだ。確かお天気お姉さんが言うには36 ぐらいだっただろうか。

通りで暑いわけだ、と心の中で呟きながら自身の教室へとたどり着く。

ドアの間からほんのりと漂う、クーラーの効いた冷たい空気を感じながら扉を開くと、教師と生徒の全ての視線がこちらへと向いた。

「神谷……………お前、また遅刻か」

「すいません、寝坊しました」

教師に適当な返事を返し、自分の席へと座る。どうやら、一時間目は数学らしい。

小テストでも行うのか、神谷以外の生徒の席にはまだ表になっていない問題用紙が置いてあった。

（めんどくさ……………）

教師に促されて、適当に筆記用具を取りだしている時に、隣の席の相沢が顔を寄せて話しかけてきた。

「なあ、神谷。お前授業の始まる十分前には学校の校門通ってたよな？ 何で遅れたんだ」

「別に……何となくブラブラしてたら遅れただけ」

「へえ、俺はまたお前が女子に告白受けてるのかと思ったよ」

つまらなそうに肩をすばめ相沢は、神谷の方から黒板の方へと顔を向けた。

ニヤニヤと顔をほころばせるクラスメイトを見て、告白ならば会長から受けたいよ、と神谷は誰にも聞こえない程度で呟く。

神谷が相沢に秋川と会っていたことを言わなかったのは、単に面倒だからとかそんな曖昧な理由ではない。

神谷拓海は会長、秋川桜との関係を周りに知られたくないのだ。

自身で『独占欲が強い』と評価する神谷は秋川が可愛いことを絶対に周りに気付かれるわけにはいかない。

自分のライバルを増やすわけにはいかないから。モテモテ神谷拓海が、秋川桜を狙うと気付かれた時には、すでに恋人になってなければ困るのだ。

でなければ、他の男子がいつ秋川に惚れてしまつかわからない。

今は鬼の生徒会長となって男子に煙たがれているが、もし少しでも笑顔を周りに振りまき、怒ることがなくなれば絶対に、秋川はモテる。

そう、神谷は確信していた。

(……せめて、会長がクラスに居ればやる気が起きるんだけどなあ)  
自分の方へと問題用紙を渡す教師の顔を見て、神谷拓海は大きくため息をつく。

切に思う。どうか、自分の知らないところで秋川が周りの男を惚れさせていないように、と。

まあ、負けるつもりはないが。

結論から言おう。

神谷拓海のその不安はまったくもって徒労に終わった。

「貴様ツ！！ 授業中に弁当を食べるとは何事かアああ！！」

「ひい！？ 許して会長、今少しだけでも食べないと昼休みまで持たないんだ！！」

「知ったことかぁ！！ お前が朝飯をキッチンと食べてないからそんなことになるんだろぅがぁぁぁ！！」

バチコーン！ と秋川のゲンコツがクラスの男子の頭にクリーンヒットする。

あわわわわ、と顔を青くする周りの男子は極力被害を受けないようにその場から早急に避難していた。

「やべーよ、うちの母ちゃんより怖え…」

「いや、俺んちの父ちゃんより怖えよ…」

「鬼だ…」

「鬼の生徒会長だ…」

「逃げる！ 巻き込まれたら死ぬぞ！！」

「回避ー！！！！ 回避iiiiiiiiiiii！！」

そんな言葉が教室に巻き起こり授業の終わりを告げるチャイムが鳴った瞬間、男子と教師は逃げるようにその場から立ち去った。

ちなみに、教師までもが逃げるように教室を立ち去ったのは早弁を黙認しているのを秋川にバレたのではないかと恐怖してのことだった。

どうやら、鬼の生徒会長は教師をも恐れさせるらしい。

残ったのは数少ない女子と、全員回避した男子に見捨てられた早弁少年Aだけ。

今にも食い殺しそうな秋川の目線に身を震わせながら、

「ゆ、許して会長……………もうしないから、しないうって約束するから……………」

「お前は何度もそう言ってただろ！？ 今度ばかりはこの程度で済ますわけにはいかん！！」

「ほ、ほら三度目の正直って言うじゃん！！ 俺もさ、気持ちを改めるから！！ 悔い改めるから！！ 母さんもビックリの大変身を遂げてみせるからッ！！」

「適当なこと言うんじゃないよ。お前、中学でも同じこと言ってたじゃねーか」

「オイ、誰だコラア！！ あの時はきちんと一週間は耐えられたんだから文句を言われる筋合いはねえぞ！！」

早弁少年Aが教室のどこから聞こえてきた言葉に過剰反応を見せた所で、真剣に怒っていた秋川の怒りが爆発し、拳を握る。

「貴様ア！！ いい加減にその適当さをどうにかしろと何度も何度も言っているだろうがオンドレエええええええええ！！」

「適当じゃない！！ これはおそらく社会に出ても必ず論議する必要があると思われる絶対的なゴハッ！！」

そんな叫びと共に、正拳突きを喰らった早弁少年がくるくると回転しながら教室を転がっていく。

ゴン！！ と誰かの机の脚に激突したところでようやく勢いが止まった。うー、と唸りながら頭を押さえる少年。

そんな少年の耳に恐ろしくほどに教室に響く足音が聞こえた。  
「ひッ！？」

一歩一歩に、ドスン！！ という効果音が付きそうな表情で秋川はゆっくりと近づくと、とびっきりの笑顔（額に青筋付き）でこう言った。

「お・し・お・き・だ」  
「アアー！！ と叫び声が教室に轟く。」

そんな執行が行われ始めた瞬間、教室のドアが開いた。

このクラスの担任の教師、真貝洋介しんかい ようすけが眠そうに目を擦りながら教室へと足を踏み入れる。

「おー。次は皆大好き世界史の時間だぞ。この前のギリシア神話

のレポートの提出は今日なんだからお前たち出さなかったらそれ相応の罰を受けると……って秋川何をやってるんだーーーー！！？」

ふんぬあー、と合気道で少年を組みふせている秋川を見て、真貝は眠そうな目をカツ！と見開き叫ぶ。

「瀬川がッ！！ 瀬川が死にそうじゃないか！ 殺<sup>や</sup>るならもつと誰にもバレないように山奥でやれよ！！」

『そつちかよ！！』

クラスメイトのほぼ全員が同時に突っ込みをしかける。

そんな先生の姿を目の端に捉えた少年、瀬川<sup>せがわしん</sup>新は、今にも泣きそうな顔でこう呟いた。

「女子特有の膨らみがあるべきところに手を当てても、何の感触もないよーーーー！！！！」

「「「お前死ぬ気かーーーー！！！！！！」」」

教室に残った生徒や真貝先生。そして、廊下にいた他クラスの生徒や、一時避難していたクラスメイトの全員がその言葉を聞いて、そう叫んだのだった。

放課後。

ホームルーム

H Rが終わり、ある生徒は部活に行き、ある生徒はそのまま家へと帰宅し、ある生徒は教室や学校のどこかで友達と話していたり、ある生徒は友達とそのままだどこかに遊びに行く時間。

夏休みを一週間後に控えたこの時期にとくに補修もなく、ただ普通で平穏な放課後が清林高校に訪れていた。

「……………」

野球部や、サッカー部の掛け声が聞こえてくる。

強い風が吹く屋上の一角。下を覗けば運動場の多くの生徒たちの姿が見渡せる場所で少年 神谷拓海は己の手提げバックを適当に置いてから、そこにゆつくりと腰を下ろした。

その屋上に落下を防ぐためのフェンスはない。

元々、屋上への生徒の侵入を禁じている清林高校は『生徒が居たときのこと』を考えて作っておらず、無駄な設備であると思われるフェンスを設置しなかったのだ。

そんな場所へと神谷は来ているのだが、彼の態度は悪びれた様子もなく、ただ当たり前のごとく飄々としていた。

実際のところ屋上に行くのに苦労はない。

ただ、屋上へと続く階段の前に置いてある『進入禁止』のテープを先生に見つからないようにくぐってくればいいという、なんとも拍子抜けするというか、それで学校は大丈夫なのだろうかと疑いたくなることをするだけ。

それで何かの問題が起きればこそも改善されるのだろうが、今までの記録上、奇跡的に一度も事件と呼べるものが起きていないため学校設立から現在までまったく変わっていないらしい。

それでいい、と神谷は思う。

個人的に屋上を気に入っている神谷としては、フェンスなんても

のを取りつけられて気分を害されるのはごめんだ。

「はやく来てくれないかな…」

誰ともなしにそう呟く。

放課後ならば、会長と遊んでいる時間だというのに（会長はそうは思っていないせん）神谷は誰もいない屋上へと来た理由はいたって単純なことだった。

呼び出し。

どこの誰だかは知らないが、ハートのシールで綴じられた手紙で放課後に屋上へと呼び出された。

内容は告白したいとのこと。

恐らく、手紙の筆跡と内容からして女だろうが神谷からしてみれば、これから来るのが男であろうが女だろうが、言う事は決まっていた。

「会長……まだ帰ってないかな？」

たぶん生徒会の仕事でもあるだろうから帰ってはいないだろうけど、と考えながらも神谷は空を仰ぐ。

陽が長くなつた夏の空は夕方の時間に暗くもなく明るくもない、なんとも微妙な風景を構築していた。

「あの……神谷くん」

と、空を仰ぐ神谷に小さくか細い声がかかった。

そちらに視線を向けると、清林高校のブレザーを着た少女が胸の前に手を置きながらゆっくりとこちらに向けて歩いてきたところだった。

その姿を見つめて、軽く目を細める。

「キミ？ 俺に話があるってのは」

「は、はいッ！ きよ、今日は神谷くんに私の思いを伝えたくて呼び出させてもらいました！ あの、えっと…その……来ていただきありがちゅ……囁んらっちゃ…」

はぁ、と神谷は小さく嘆息した。

（やっぱ……ダメだ）

自分はかなり、秋川桜に惚れこんでいるようだ。

無意識に、この目の前の少女と秋川を比較してしまい、どうしても秋川のことを考えてしまう。

「あの、私……隣のクラスの宮崎って名前なんですけど……覚えてます？」

「ああ……覚えてるよ、宮崎さん。確か、一年の時に同じクラスだったよね」

「覚えていてくれたんですねッ!？」

感動が何か知らないが、目を光らせる宮崎を視界の端に捉えはしているものの、神谷の意識はすでに別のところへと飛んで行っていた。

そう言えば、まだ一度も会長と屋上に一緒に来たことないな、なんて思いながら神谷は立ち上がり、少女、宮崎の元へと向き直る。「で、今日は何の用なの？」

「えっ、……いや、その……あの、言いたいことがあって……」

言いよどむ宮崎を見て、少し、急<sup>せ</sup>かしすぎたか、と神谷は一人嘆息する。

もう少し、相手の話を聞いた方がいいかもしれない。

タイミングは向こうが勝手にとってくれるだろう、と考え神谷は適当に話題を振ることにした。

「そう言えば、二日間ほど休んでたよね。どうかしたの？」

「ひゃい!？」 神谷くん、クラスも違うのになんでそんなこと知ってるの？」

これは脈アリなんだろうかとでも思っているのか、頬を赤く染める宮崎。

そんな宮崎に気づきながらも神谷は、そっけなく一言で返す。

「……… たまたま」

「たまたまって、ウワサでも流れてたんですか？ わ、私が休んでるっていうのが……」

「なんか、誰かが話してたのを覚えてただけだよ。気にしないで」

はぐらかすような神谷の言葉に、はあ、と渋々といったふうに答え、宮崎は頭をかいた。

「でも、嬉しいですよ。そんな、くだらない話でも、私のことを覚えていてくれたっていうのは……」

「……………」

「それに、ここに来てくれたっていうのも、すっごい嬉しいんですよ。本当のこと言うと、来てくれないかと思ってました。神谷くんはモテモテでたくさん告白されてて、もう女の子には興味がない、なんてウワサがあるほど嫉妬されてて、同時にいろんな人から尊敬される人だから、私みたいな地味な女の子が呼び出しても来てくれな  
いかと……」

「俺はそんなに大層なもんじゃないよ。ただの一般生徒である男の子っただけ。それにキミには少し聞きたいこともあるしね」

「聞きたいこと……………ですか？」

首を傾げる宮崎に神谷は、気にしないで、と手を振る。

すると、宮崎は『むう……この人、私の質問に答える気がないぞ』的な表情を作り頬を膨らませた。

そんな表情をされるとそこの純情少年なら一発でK・O・できるだろうが、さすが女に慣れている神谷が、微動だにすることなくむしろ面倒くさそうにそれを見据える。

「大したことじゃないよ。そんなことよりも」

と、そこで神谷は言葉を区切り、

「キミも俺に聞きたいことが　言いたいことがあるんじゃないの？」

「っ……………」

カアアア、と頬を極限まで染め上げ、宮崎は再び顔を俯かせる。少女を見据える神谷は、その少女が話すであろうことを何も言わずに待続けた。

元々、相手の勇気の問題なのであって自分がどうこうすることなど出来やしないことを神谷はしっかりと理解しているつもりだ。

数秒の沈黙。

不意に、少女が顔を上げた。

口を何度も開閉させては、唾を飲み込み、少女は胸に手を置き、ゆっくりと神谷の方へと顔を上げた。

「聞いてくれますか？」

「……………」

少女の言葉に無言で答え、神谷は目を細めた。

宮崎はそんな神谷の態度を『YES』と受け取り、数瞬の逡巡を繰り返してから目をつむる。

「神谷くん……私は一年生のときからアナタのことが気になって気になって仕方ありませんでした。気付いたら目で追っていて、気付いたら好きになってました。お願いです……神谷くんがよければ私を彼女にしてくださいませんかッ！！？？」

「……………」

そして、また流れる数秒の沈黙。

言い切った少女はただ答えを待ち、答えを唯一持つ少年は沈黙を作る。

不意に、風が吹いた。

フェンスのない屋上のおかげか、結構の威力の風を感じる。

心地よい風だった。

そして、少年は口を開く。

「悪いけど」

いつもと変わらぬ、飄々とした態度で、開いた口から言葉を出す。

「キミとは付き合えない」

ビクン、と少女の肩が震えた。

宮崎は思わず目尻に涙を浮かべながら、辛うじて言葉を紡ぐ。

「どうしても、ですか？」

「どうしても」

「私じゃ、ダメなんですか？」

「……………」キミじゃダメなんだよね」

そうですか、と呟き宮崎は天を仰いだ。

雲の流れる空を見て、少女は涙を必死に堪えていた。

「最後に……………いいですか？」

「……………なに？」

「私がダメな理由を教えてください。他に好きな人が居るとか、好きなタイプじゃないとか、これからの参考に聞いておきたいんです」  
「お願いします、と天を仰いだまま、少女は神谷に言う。」

神谷はほんの少しだけ嘆息した。

頭に手を置き、やれやれといったふうに関口を開く。

心の底から面倒だと言わんばかりの表情で神谷はこう言った。

「キミ……………人間じゃないでしょ」

空気が凍りついた。

え？ と少女は思わず声を挙げた。

天を仰ぐ顔を神谷へと向け、困惑の表情で目を見開く。

「な、にを……………言っているんですか？」

「……………、」

「ねえ、神谷くん。なんとか言ってくださいよ……………私が人間じゃないだなんて……………」

「……………、」

瞳孔が開いているんじゃないのか、と疑いたくなるほどに目を見開く宮崎は後ろに後ずさりながら自らの持つカバンを落とした。

ドスン、と小さな音を立ててカバンが屋上の地面へと落ちたのを拾おうともせず、宮崎は後ろへと後ずさり続ける。

神谷の目がスツと細まった。

そして、一步を踏み出す。

それに合わせるように宮崎も足を後ろに一歩動かす。

カツ、カツ、カツ、カツと数回、靴が屋上を叩く音を響かせてから　　屋上にそれ以外の音が響いた。

ガチャン、と鍵を閉める音。

後ろ手で屋上への入り口であり、出口であるドアノブに触れた宮崎は先ほどの困惑の表情をコロリと変えて。

「なあってバレたかなあ」

直後。

ガコン！！　と船の船体と船体をぶつけたような鈍い衝撃音が辺りに響いた。

それに釣られるように世界が紅く染まり始めた。

空も星も何もかもが紅く、紅く染まり人の姿を除いてすべてを紅く染めゆく。

「あれあれあれ？　なあってバレたかなあ……不通の航行生に木づけるようなものじゃないのですが」

気付くとそこはすでに己の知りうる現実ではなかった。

外の運動場はあるが、そこにはさっきまで居た部活動生や顧問の先生の姿が一つも見えない。

普段ではありえないほどに紅く染まった床や空。

そして、それらを押しのけ己の存在を大きく主張するものがあつた。

満月。

紅く紅く紅く染まり、クレーターをもはつきりと見えるほどに大きく紅い月がそこにあった。

「まあ、いつか。どの未知、殺すことに代わりはありませんし、さつさとアナタには死んでもらいましょう。クイーンの覚醒にアナタは邪魔なんです」

宮崎のその言葉に神谷は、わずかに眉を細めた。

「クイーン？　こんな田舎の学校に五年前の戦争の裏切りものがい  
るとは思わないけど」

「んん？　なんですか、アナタ。何やらこちらの自乗を市ってい  
るようですが：おかしいですね。これはおかしい。ただの航行生が  
市りえるものじゃないのですか：」

不思議そうに首を傾げ、宮崎は天を仰ぐ。

紅く染まる空には幾重もの星が光り、雲一つない快晴は満月を映  
しだし、静かすぎる屋上には一陣の風も吹かない。

その光景を見て満足そうに笑みを浮かべ、少女は何かに気づいた  
ように目を見開いた。

「ああ、そうか。アナタ、魔術師ですか。いやはや、こんなにわか  
い魔術師が航行生をしてるなんて初めて市りましたよ。これも『教  
会』の任務ですか？　その巢型も年令も嘘偽りなんでしょう？」

クスクスクス、と口に手を置きながら少女は笑う。

直後。

シュン、と小さな音を立てて、宮崎の姿が消えたかと思うと、神  
谷の目の前に気味の悪い笑みを張り付けた宮崎が現れた。

人間には視認できないほどのスピード。何かの『術式』を使った  
のかもしれないし、何かの『能力』を使ったのかもしれない。

どちらにせよ、神谷はそれを確認しようとは思わなかった。

「通りで『魅惑』の術式が聞かなかったわけです。一流の魔術師だ  
っていうならある低度の魔術的耐性がついていてもおかしくはあり  
ません」

宮崎の手が、神谷の首に触れる。なぞるような動きで、首から耳  
までに手を移動させ少女は顔を寄せる。

息がかかるほどに顔を近づけて、目で目を見てから言葉を続けた。  
「つまらないものですね。この低度の速度すら対応できないだなん  
て、可愛そうに。『教会』もバカなことをするものです。私たち『  
エンジェル・ブローカー  
墮天人形』をこんな初心者魔術師にやらせようなんて何を考えてい

るのでしょうか」

「……………キミ達、何がしたいの？」

「へえ、私だけじゃないと気付いているのですか。面白い……………まずまず、興味部かい。アナタこそ何が目的なんですか？ 『教会』がアナター人を贈りだしたとは思えませんか。まだ、魔術師がいるのでしょうか。『教会』のジジイ共がクイーンの所在に気づいているのは以外でしたが」

ぐにやり、と少女は妖艶な顔を笑みともいえないいびつな形に歪ませる。

神谷はその顔を見ても表情を変えずに平坦に返した。

「『教会』のおじいさん達は頭が堅いからね」

「クスクス、魔術師さんがそんなことを云ってもよろしいのですか？ 仮にも上司なのに失礼ですよ」

気が変わりました、と宮崎は呟く。

「どうです、私たちと一所に来ませんか？ 『教会』のアホドモなんぞ護る可知名なんてありはしませんよ」

スツと目を細めて宮崎は神谷の顔を持つ手に力を込めてから、己の足で神谷の足を踏み、さらに顔を近づけた。

神谷はまたもや、まったく表情を変えずに少女へと言葉を返す。

「どうせ、俺の姿を奪ったら殺すんでしょ？」

「あれ、市っぺいらしたんですか？ でも、大丈夫ですよ。安心してください。私はアナタのその観察眼に惚れた、と言っているのです。どんな魔術師でもそう感嘆に私たちの小体を見破ることなんて出来ませんからね。アナタにバレタ時は本当にびっくりしたんですよ。さっきまでは殺そうと思っていましたが気が変わりました。アナタの眼を私は欲しい」

「へえ、そりやどうも」

「うん、何かご不満でも？ こんなことで命を拾えるのなら安いもんでしょう。もしかして『お前らみたいな人殺しには絶対に屈しない』なんて馬鹿げたことを云うんじゃないやありませんよね。つまらない

維持なんて張ってないで大人しく従ってくればいいんですよ。私の主だってアナタほどの観察眼ならば喜んで迎え入れます。こちらも、そう悪いところではありませんよ。アナタ意外の人間だっていますし、『教会』のようにかた苦しいルールもありませんから楽しめるはずですが…」

「つまらないよ」

宮崎の言葉を遮って神谷が口を開く。

続けようとした言葉が口の中で止まり、ポカンと口を開けた宮崎は予想外の回答に思考を停止させた。

それは、少女の理想とする答えとはかけ離れていたから。

そんな彼女の手を振りほどき、神谷は自分から宮崎の方へと顔を近づけ、耳元でこう呟いた。

「秋川のいない生活なんて、つまらない」

「ッ！！！」

ゾクッ、と少女の背に何かよくわからないものが走った。

思わず神谷の身体を押すようにして離れ、床で靴底を削るように滑りながら距離を取り、宮崎は息を呑む。

あつたのは純粹な『恐怖』。

声しか聞いていないのに、そこにあつた明確な殺意を嫌でも感じさせられた。

「アナタ、何なんですか？」

表情を引きつらせながら問いかけてくる宮崎を見て、神谷は薄く笑いながらこう答えた。

「変態ストーカー、かな」

どっかの誰かさんがそう呼ぶから、と神谷は続ける。

彼は、鬱陶しそうに髪をかき上げながら、

「正直、アンタ達は何を企んでいるかなんて興味はない。でも、この学校で何かが起こったら秋川が悲しむだろうから　邪魔させてもらうよ」

神谷の顔から笑みが消えた。

真剣身を帯びた表情に感情はなく、冷やかな視線が宮崎を貫く。  
そんな視線を受けながら、宮崎は怪訝そうな顔で片眉を釣り上げた。

「……………秋川？　今、アナタ秋川って云いましたよね。それってもしかして、生徒会長『秋川　桜』ですか？」

直後。

ガコン！！　と先ほど聞いた船の船体同士をぶつけたような鈍い衝撃音が紅い空間に鳴り響いた。

軽い揺れが建物を震わせるのと同じように、宮崎も楽しそうに肩を振るわす。

「秋川桜様、ご入室」

「ッ！！！？？」

神谷の表情が驚愕に変わる。

小さく舌打ちしてから、宮崎が居る方とは反対のほうに向けて走り出した。

（　　秋川ッ）

逃げるのではない。もし、宮崎の言っていることが本当なら迅速に彼女を助けに行かなければならないだろう。

屋上の縁に足をかけ、そこから飛び降りる最短ルート。

そこへ。

ゴッパアアアアアン！！　と屋上にあつた給水タンクが神谷の身体に激突した。

給水タンクは電柱にぶつかる車のようにひしゃげ、中の水を辺りにまき散らしながら屋上の一角を吹き飛ばし、細かい粉塵を舞い上げる。

「うん、どうやらアナタは『教会』の魔術師ではなさそうです」

スウ、と宮崎の眼が蒼い光を灯す。

地上から足が離れ、まるで見えない階段を上るようにして宮崎は空を歩く。

スカートなどというものを気にせず空を歩く少女は眼に蒼い光を灯しながら、屋上から五メートルほど浮き上がってからその動きを止めた。

「『教会』の命を浮けて来ているならば、クイーンのことを真名の秋川桜で呼ぶはありますか。先ほどの会話でもクイーンのことを詳しくは市らなかったようですし……」

シュルリ、と制服のリボンを取り空へと投げ捨てる。

「さて、クイーン秋川桜を向かえに行きましようか。彼女の覚醒の準備はすでに整って」

「その話、詳しく聞かせてもらおうよ」

ゴン！！と宮崎の頭に衝撃が走った。ミシミシ、と軋む頭の骨。少女が神谷拓海の回し蹴りが直撃したことを理解する前に、身体を屋上の地面へと勢いよく叩きつけられた。

バウンドする少女の小さな身体。

それに連動するかのように鳴り響く骨のいかれる音。地面へと叩きつけられた少女は足の関節があらぬ方向へと曲がり、首が約一八〇度回転する変死体と化す。

それに少し遅れて、神谷が屋上に足を着ける。

五メートルほどの高さからの着地だが、その衝撃はビックリするほどに小さかった。

「……………」

そして、神谷は少女の身体を見つめる。

ピクリ、と手が動く。

まだ、終わってはいない。

《キヒ、きはきはきこくひひはは！！！！》

ゴキン、と骨の折れる音が鳴った。

《ふひひひふいふいきこけかかかか！！　　イイねイイね。すつば

らしいよ！！ クイーンを護るナイトってトコロかア！？ 世界の裏切り者、クイーンを護ろうなんてアンタかなりの変わり者だな》  
唐突に、声質が変わる。

先ほどの、高い声ではなく、一度フィルターにかかったかのような不自然な声音。

ふわり、と糸に引かれるように立ちあがり少女は折れまがった首をゴキリ、と元の位置に戻す。

何度か調子確かめるようにして首を傾けてから、少女は笑う。  
眼に蒼い光を灯し、狂った表情を見せる宮崎は両の手を広げ、願うようにポツリと呟いた。

《PLEASE KILL YOU》

ピシリ、と宮崎の頭に幾重もの縦線と横線が走った。

その縦線と横線により出来あがったのは小さく細かい長方形。

小型キーボードのようにも見えるそれは、カタカタと音を立てながら折りたたむように移動し少女の頭に大きな風穴を開ける。

《だいたい、アンタがどれほど頑張ろうが結果はかわらないヨ。クイーンの覚醒はすでに始まってイル》

そこから現れたのは手。

ぬっ、と飛び出すように穴の縁に手を掛ける。

ぐぐぐ、と手に力を入れて、穴の中から手に繋がるものが見え始めた。

《私たちがやろうとしているのはただその時間を短くしようとしているだけ。それを邪魔するだなんて意味のないことだ》

次に見えたのは頭。

まるで絵画にでも書いてありそうなパーマの天使の子供のような頭。

しかし、それに安心を感じさせる安らかさはない。

人形のような無機質な瞳に蒼い光を灯し、人形のような接続部分を表すいくつかの線。

そして、身体、手、足と見えてきたところでその全容が見えた。

それらを『中』から出して空になった宮崎の身体はチリとなって消え、その場に残ったのは一つの不気味な物体だった。

《お前がナニをしようがこの事実に変わりはナイ。大人しく私に殺されてろヨ！！》

言い表すなら天使。

しかし、それを天使と呼ぶには少しばかりか抵抗がある。

焦げた翼に、人形のように角々しい身体。見たものに不快な思いしかさせないであろうそれには名前があった。

《いぎひやはひよほははは！！！！》

歪な口を開き、笑う人形      名を『エンジェル・ブローカー墮天人形』という。



## 第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

4・5 (前書き)

うつ…

記念すべき最初のお気に入り登録がッ！

こんな駄文を読んでいたいただきありがとうございます…！！

エンジェル・ブローカー  
『墮天人形』。

過去にあった一つの計画、『クオーツエフェクト』によって作られた人類最大の失敗作品。

世界最大の魔術結社『教会』の管理下に置かれる研究機関が指導した『クオーツエフェクト』は魔術を使つての実験を繰り返した。魔術とは、人類の奇跡と呼ばれる一種の『チカラ』。

術式、魔力、そして記号を使つて使用される魔術。一般的に知られていない魔術を使つての実験は当たり前のように秘匿されていた。『クオーツエフェクト』の目的はいたつて単純。

人工的に天使を作ること。

神からの贈り物と呼ばれるものが世界には溢れている、という考えがある。神が神の使いたる天使を使つて人類に恵みを与えることが真理。

ならば、これ以上人類が進化するのに簡単な方法があるではないか。

それが人工的な天使。神の恵みを運ぶ天使を作れたとしたら何ができるのかなど、想像もつかない。

天からの使い、天使を模して造られた『魂が入る人形』は人々に多くの夢を与えた。

不可能を可能に。想像を現実に。夢を真実に。

出来ないことを、出来るようになることほど魅力的なことはあるだろうか。

結果的な話、実験は成功した。『魂の入る人形』を作り神様からの贈り物を手に入れることは出来はしたのだ。

しかし、その成功は『クオーツエフェクト』の望むものではなかった。

『魂の入る人形』の暴走。

人間の制御を逃れ、人形は一つの兵器として動き始めた。  
『神からの贈り物』 彼らの持つ一つの『能力』を持って。

## 第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

5 (前書き)

ちよつと、長くなるかもしれませんが

ご勘弁を…

本格的に戦闘に入るので、楽しんでいただけたら光栄です

秋川桜は、目の前で行われている長つたらしい授業を聞きながらうんざりした表情で頬杖をついていた。

現在の時刻は授業終了の鐘が鳴ってから一〇分が経過している。だというのに、いまだ教室で教卓に立つ数学の教師。

正直、授業が終わりになったのならさっさと帰るなりなんなりしたい生徒の面々がヒソヒソと不平不満を並べるのが秋川の耳にまで聞こえてくる。

『あと少し！！ 最後まで行かせてくれ！』

と言う先生の必死の形相に誰も口を出さなかったが、やはり思うところは皆あるらしい。

まあ、秋川もそれなりに思うところがあるのだが。

（つかこんなに長く授業ってやっていいものなのか？）

数学の先生の悪い癖か、最後まで問題をやり遂げないと授業を終わらせないのだ。

一応、聞いてはいるものの自分のすでに理解している部分だし、なにしろやる気がない。

いつもは背筋を伸ばして、きちんと授業を聞く少女は、だらんと眠そうに目を緩め、気だるそうな雰囲気醸し出していた。

（なんか妙に疲れてるな…… 今日はいつにも増して身体がだるい）  
昨日は特に何もしてないはずだが、どうしてこんなにもなー、と頭の中で呟く。

何もする気が起きない。まるで、全力でフルマラソンを走りきった気分だ。

ペンを教科書の上に放りあげ、両手でわしゃわしゃー、と頭をかく。

今日は生徒会の仕事を早めに済ませて帰ろう。そう心に決めて少女がペンを持ち直すと、数学の教師が解説を終え満足げな顔でテキ

ストを閉じていた。

「ふむ、今日はここまで。すまなかつたな長引かせて。んーと、長引いた時間が十分だから……次の授業は十分早く終わらせる。挨拶は良いぞ。今日はお疲れ様」

皆で座りながら軽く会釈。

その後、数学の教師の言葉に各々席を立ち、帰る準備や近い席のやつらと話し始め一瞬で教室が騒がしくなる。

「ゲーセン行こうぜー」

「金がねえ、パス」

「じゃあ、カラオケは!？」

「一人で行つてろ」

そんな耳に届く会話に、暇なやつらはいいよなーなんて思いながら秋川も机の中にある教科書をバッグの中にぐぎゅうう、と詰め込んでからゆつくりと席から立ち上がった。

その時だった。

「……………」

秋川の視界が霞む。貧血のように身体から力が抜け地面に倒れようとするのを机を支えにして防ぎ、秋川は頭を押さえる

(あれ…………昨日、ちゃんと寝ただけだな)

ズキン、と頭が痛む。

じりじり、と胸が焼けるような感觸を覚える。

平衡感覚を失い、思考回路が止まる。

そこで、不意に思った。

唐突に、脈絡もなく、一瞬に。

理由もないはずなのに、原因もないはずなのに。

秋川は、こう思った。

あれ、私はどうして、こんなところで学校になんて行っているのだろう？

「桜? どうしたの、大丈夫?」

ポン、と軽く肩に触れるようにして詩塔楓しとう かくでが手を置く。

すると、何事もなかったかのように秋川を襲う頭痛がひいた。

「え？」

「え、じゃないよ。どうしたの。また寝てないの？」

ぷく、と頬を膨らます親友は『またですかコイツこのやろっ』  
というふうに秋川を睨んで腰に手を置く。

過去に秋川が無理して寝ずに仕事をしていたことを思い出しているのだろう。

その時の楓ほど怖いものはなかったと秋川は記憶していた。

「いや、別に寝てないわけじゃない。ただ、ちよつと貧血がな。栄養が足りてないのかもしれない。あははははっ」

「んもう！ バカみたいなこと言っただけで少し保健室に行きなよ！ 生徒会の人たちには私から言っておくから！！」

「そういうわけには……」

「いいからッ！！」

ぐいぐいと背中を押され秋川は苦笑いを浮かべる。

（まったく。楓には敵わない……）

「わかったから。背中を押さないでくれ。帰る用意してから保健室に行くから……」 いや、ホント行くから」

楓の半眼での視線から逃げるように秋川は背を向ける。

教室の後ろにあるロッカーへと移動し、スカートのポケットから手慣れた手つきでカギを取りだして、ロッカーにかけた自分の南京錠を開ける。

中から帰ってから使うものだけを取り出してから再び、パンパンになった手提げバッグにぎゅうう、と詰め込んだ。

基本、秋川は教科書を学校に置いて帰らない。家でこまめに予習復習をするために全てを持って帰るため少女のロッカーの中には体育館シューズしか残らないことが常だった。

しかし、今日はそうはいかないらしい。

「……………」

カバンの中の体操服が邪魔で教科書が入らない。工夫して入れて

みるものの変化なし。

先ほどと同じように無理やり詰め込んでみるも、それではチャックが閉まらない。

これほど体操服を鬱陶しいと思ったこともないような気がする。

「……………しょうがない」

いくつかの教科書を置いていくことにしよう。

取りあえず、あまり勉強しないであろう日本史と国語を置いていくことにする。

適当にロッカーの中に教科書を突っ込み、南京錠を閉める。

すると、バキンと音がした。

「ん？」

見ると秋川の閉めた南京錠が、真っ二つに割れて地面に落ちていた。

「あれ？ 南京錠ってこんなに簡単に壊れるものだったか」

手に取って見ると切り口はまるで日本刀で切られたように綺麗だった。

新しい南京錠……買わなきゃな、と考えながら取りあえず割れ

た南京錠をカバンに放り込む。

「桜、どうしたの？」

「いやちよっと、な」

深く考えることもないだろう。物なんてやつはいつか壊れるものだ。適当に言葉を返し、秋川は教室の出入り口へと楓と共に足を向けた。

まずは保健室だ。楓が納得するほどの検査を受けてから（学校で受けれる検査などたかが知れてはいるが）秋川は家に帰ることになるだろう。

と、教室を出ようとした彼女たちは足を止めた。

なぜなら、先ほどまで授業をしていた数学の先生が二人を呼びとめたからだ。

「秋川、少し話したいことがあるのだが、今はいいか？」

「へ？ 私にですか」

「そう、キミにだ。この話は個人的な情報が入ってくるから別の部屋するのが理想なのだが、これから何か急ぎの用でもあるのかね？」

問いかける先生は楓を横目で見る。個人的な情報、ということは楓が居たらいけない話なのだろう。

もしかしたら、会長としての話かもしれないし、いずれにしろ聞いておかねばならない話だ。

「すぐに終わるんですよ」

「ああ、大丈夫だ。五分も時間はとらん」

五分も時間を取らない重要な話とは、どれほどのものか疑問の残るところだが仕方がない。

あとに延ばしてもいいことなんかないのだ。

「では、少し秋川を借りる」

「はい、わかりました。じゃあ、桜。私、先に行ってるからきちん」と保健室来なきゃダメだよ！」

「ああ。わかってるよ」

「ぶー」と頬を膨らめせる楓に苦笑いを堪えながら秋川は言う。

短い言葉だが、はつきりとした返答に満足したのか、楓は先生に軽く挨拶をしてから教室を出た。

「で、先生。何の用ですか？ 別の部屋ってことは相当重要な話とは思いますが……」

「場所は補修室だ」

「……………補修室ってありましたっけ？」

一年のときにすべて覚えたつもりだったが、どうやら知らない教室があるらしい。

「生徒会長が何を言っているんだ」

そう言って、先生は手を秋川の右頬にあてた。

まるで、宝石でも見るような目で秋川を見て、先生はニヤリと笑った。

「秋川。キミは今から補修の時間だ」

直後。

ガコン！！ と船の船体同士を打ちつけたような鈍い音が響き、  
辺りが紅く染まり始めた。

紅く染まる壁。紅く染まる机。紅く染まる椅子。紅く染まる黒板。  
紅く染まる 月。

人間を除く空間全てが紅く染まり、まるで初めから何もいなかったかのように生き物の姿がその場から消えた。

いや、生き物すべてではない。すくなくとも秋川と目の前の先生、  
そして椅子から立ち上がる二人の少年と少女だけが教室に存在した。

「ふむ……準備は万端。始めよう」

秋川の頬に触れた手を離し、先生は呟くように言う。  
それが合図だった。

グリーン！！ と明後日の方向を向いていた少女と少年が首を秋川  
の方に向ける。

《キヒヒヒヒヒッ！！ お迎えにあがりました、秋川<sup>クイン</sup>桜様》

《お目覚めの時間ですヨ》

少年と少女、二人の口から一度フィルターにでもかかったかのよ  
うな不自然な声が出ると同時、ピシリと音がした。

直後。

ブチン！！ と少年の首が真上に勢いよく飛んだ。

バチン！！ と少女の身体がのけ反るような形でクの字に  
折れた。

首が飛び、残された身体だというのに少年から血は流れず、その  
足は崩れない。

頭が背中につくほどにクの字に曲がり、立てる状態ではな

いというのに少女はその両足を地面につける。

そして変化は唐突に、脈絡もなく、不意に起こる。

少年の身体に首が繋がっていた部分から、白い棒のようなものが勢いよく飛び出した。

それは、人間の骨だった。小学生の保健体育でも習いそうな腕の骨が肉の無いまま少年の身体から飛び出したのだ。

しかし、それは白骨ではなかった。鉄を極限まで磨いたような、加工された鋼を思わせるような光沢のある銀色だった。

少女の身体のカの字に曲がる頂点の場所から、ピンク色の球体が突き出た。

腹を食い破るようにして出てくるそれは、人形の頭だった。しかし、巨大だ。明らかに人間の中には入りきれないその頭の体積は、まるでバンスボールほどの大きさで、それでいてずっしりとした重量を感じさせる。

少年の身体から飛び出した白銀の腕が地面に手をついた。

少女の身体から突き出た人形の身体が見え始めた。

白銀の骨の手がグググと力を入れる。

人形の身体がずぶずぶと腹からにじり出る。

そして、メキメキと音を立てながら二つの身体から一つずつの『怪物』が出現した。

少年の身体から出たのは、白銀の骨で身体を形作るガイコツだった。しかし、そのガイコツには一つだけ眼球があった。赤く光るその瞳には秋川の姿だけが映っている。

少女の身体から出たのは、女の子のおもちゃのような赤ん坊の人形だった。しかし、その人形は巨大だった。天井にも届きそうな人形は無機質な瞳を秋川に向ける。

(……なんだこれ)

秋川は、思わず手元にあるカバンを落としながら今の状況にただ混乱していた。

(……なんだこれ)



その柄を手に掴み、無造作に横に振るった。

先生と秋川の距離は、三メートルほど。

どうやっても、その刃は秋川に届くことはないはずだが、

「がつ！！？？」

秋川の身体は横からの衝撃を受け、宙を舞う。

ガシャン！！と音を立てて窓を打ち破り少女の身体は大きな運動場へと弾きだされた。

魔術。

人智を超えたその力が働いたことを彼女は理解していた。そしてそれがわかってしまう異常性もまたもや理解していた。

地面を滑り切れず、身体を回転させてゴロゴロと地に転がる。

地面に着地し、一〇メートルほどいったところでようやくその動きを止めた。

「つう……………けほっけほっ！」

舞い上がった土煙りが、少女にせき込むような息を強制させる。

手を地について身体を起こすと、制服は汚れているが身体には何の傷もないことに気付いた。

「クソっ……………」

何が起きているのかがわからない。

それだけが、唯一秋川に理解できないことだった。

立ちあがり、学校の方を見ると屋上から煙が上がっていた。断続的に起こる爆発が学校を揺らし、二階三階部分の窓を破壊する。

まるで戦場のよう。

見慣れないその様子を見て、秋川はそう思った。

天を仰ぐと、赤く染まる空や信じられないほどの数の星が頭上を支配していた。

それはプラネタリウムのような幻想的なものと同時、通常ではありえない不気味なものだ。

そして、一番に目につくのが紅く染まる巨大な月。通常の月の五倍ほどはあるだろうか。クレーターが肉眼で確認できる大きさのそ

れは空の中心に陣取り、辺りを照らす。

名を『あかつき紅月』。

それは、月だけを指すのではない。『エンジェル・フローカー堕天人形』が作り出す隔離空間を、そう呼ぶのだ。

世界から切り離されたこの空間から抜けだす方法は一つ。作り出した本人、すなわち『エンジェル・フローカー堕天人形』を破壊すること。

そこまでを理解して秋川は校舎を見た。

目に映るのは、ゆっくりとこちらに近づいてくる二体の『エンジェル・フローカー堕天人形』の姿だ。

秋川を外に弾きだした剣を手元で回転させながら数学教師クリストファー＝ミカエルは眉をひそめる。

「ふむ。どうやら、一匹ネズミが入り込んでるみたいじゃないか」あれほど『無駄なことはするな』と言い聞かせておいたのに。計画が狂ったらどうしてくれるのだろうか。

しかし、ネズミの一匹や二匹、心配するほどのものではないだろう。今回の計画はすでに最終段階に入っている。

一体が軍隊の一部隊にも匹敵する『エンジェル・フローカー堕天人形

を三〇体。そして、それをまとめるのは魔術師である自分だ。これほどの戦力を前に一人でどうにかできるほど世界は甘くはないだろう。

《クリストファー様》

《私たちも暴れたいヨ》

彼の背中に人形の声がかかる。

人形の方に首だけを動かし肩越しにそれらを見てから、  
「行け」

ガン！！ と窓が砕け散った。

ミカエルの答えが聞こえたのかは分からないが、教室の窓を打ち破り人形は運動場へと飛び出す。

勢い余ってクイーンの器を破壊したりしないか、正直不安だ。

男は天井を それより向こうの何かを見る。

断続的に揺れる建物に断続的に聞こえる爆音。屋上で起こる戦闘はどうやら時間がかかりそうだ。

「……仕方ない。面倒だが、不安の種は自分で摘んでおこう」

ダラリと下げた諸刃の剣を改めて握りしめ、ミカエルは下から上に振りぬいた。

瞬間。

ゴガガガゴガガガギギギゴギギ！！ と壮絶な音を立てて校舎が一刀両断された。

支えになっっている柱がいかれてもしたのか、壁には大きな亀裂が走り気持ちの悪い不協和音が絶えずミカエルの耳に届く。

しかし、彼の攻撃で校舎が倒壊することはなかった。

倒壊はしたものの、その原因はミカエルでないことは明らかだったのだ。

なぜなら。

彼の攻撃で校舎が倒壊する前に、別の大きな衝撃が真上から校舎に叩きつけられたからだ。

「！？」

ゴウン！！ と大きな衝撃音と共に瓦礫がミカエルに向かって降り注いだ。

彼は、ロングソードを持つ手とは反対の手を軽く振るう。

虚空から現れた剣は、八〇センチもの長さのロングソードよりや

や短く小ぶりに見えた。

それを握り、ミカエルは運動場の方へと思い切り飛んだ。

魔術により強化されたその脚力は、人間の限界をいとも容易く超える。瓦礫の崩落範囲から一秒以内に逃れることなど朝飯前だ。

途中、身体に当たりそうになる瓦礫や机などを剣で弾き飛ばしながら彼は安全圏に辿り着いた。靴の底を滑らせて衝撃を殺す。

（つまらん。ヤケになって魔術でも暴発させたのか……ッ！！？？）  
そこで見た。

彼に向って砲弾のように飛んでくる一人の少年の姿を。

ガッキイイイイン！！と金属音が辺りに鳴り響いた。

クリストファー！！ミカエルは左右の剣を交差して相手の攻撃を受け、色素の薄い目を持つ少年は彼に向けて漆黒の槍を叩きつけていた。

「こんにちは、先生。秋川のお迎えに来ました。彼女、どこにいるの？」

「知らんよ。本当に知りたければキミが探せばいいじゃないか。な

あ  
神谷！！」

ミカエルはこの少年が何者かを理解していない。

この高校に通う十七歳の二年生などという表の情報などではなく、こちら側に置いての少年の立ち位置についてだ。

屋上での会話を傍受してはいたものの、少年が何を目的としているかなど、毛ほどもわからなかった。

しかし、一つだけ分かっていることがある。

この少年は味方ではない。

相手を殺すのにこれ以上の理由などいらない。

（迷いは無視。この計画の邪魔になるのなら、死を持って償わせよう）

ミカエルが少年　　神谷拓海の槍を押し返す。神谷はその動きに逆らわず、逆に力に変えて後ろに飛んだ。

しかし、男は少年をそう簡単には逃がさない。

空中を舞う神谷とそれを追うミカエルが二刀と一槍を交差させる。ギギゴガギゴゴゴガガガギ！！と連続した金属音が鳴り響き、一、二、三と打ち合いその度に黄色い火花が散っては消えた。

流れ落ちる火花を想像させる光景を作り出し、彼らは互いの一撃の衝撃で小さく距離を離れた。

重力に引かれ二人はほぼ同時に地に足をつける。

神谷はひゅ、と息を小さく吐いた。

ドッ！　と地を踏み砕く音を置いてけぼりにし、二人は空中で激突した。

ドーム状に広がる衝撃波が辺りに転がる瓦礫を吹き飛ばし、地面をめくりあげる。

さながら爆心地のようなクレーターを作り出し、二人は打ち合った場所から五〇メートルほど離れた。

ヒュン、と槍を回転させ迎撃の構えを取ってから、神谷はミカエ

ルに鋭い視線を向ける。

「いつの間に悪魔に魂を売ったの？ アナタがそんな人だとは思わなかったけど」

「くだらんな。つまらん思いこみに左右されるわけでもないのだから。いつまでも生徒に教える先生を演じてもらえと思ったのならそれは大間違いだ」

「くだらないのはそつちも同じでしょ。中波先生だなんて名乗ってにおいて、本当は『クリストファー・ミカエル』だなんて、神の名前を己の名に入れて神への冒涇にならないの？」

「キミに名乗った覚えはないのだが……ふむ、そうだな。まあ偽名なのだから気にすることはないが私は少々この名前を気に入っているな。神への冒涇だなんて、胸が躍るじゃないか」

言い終わるや否や、彼は一直線に少年の方へと突っ込む。

再び、生徒と教師は己の獲物を打ち合わせた。

ドッパアアアアアアン！！と、もう一度広がるドーム状の衝撃波。先ほど削ったものをさらに削り、破壊を辺りにまき散らす。刃を互いに押し合い、交差する視線。

「悪趣味すぎるよ、先生」

「そうかな？ 我ながら良い根性をしていると自負しているのだが」「それを踏まえてもう一度言っけど、悪趣味すぎるよ」

ギイン！ と刃が交差する。

とにかく攻撃回数が多い二刀流に、神谷は漆黒の槍を回転させながら器用に防ぎ、時に反撃する。

槍の本当の使い方は突くだけではない。

全てを鋼鉄で作られるその柄で相手の攻撃を受け止め、跳ね返しその時に生まれる回転力に逆らわず振り切る。

剣のように一度戻す必要はない。回転力によるテコの原理を使い柄による打撃、刃による切断の二通りの方法を取れるのだ。

棍棒のように肩、腹、足を支点や力点にして変幻自在の連続攻撃は、二刀流の相手にもまったく引けを取らなかった。

「さて、貴様は『教会』の差し金ではないのであろう？ 何が目的だ」

「さっき言ったでしょ。秋川を迎えに来ただけだって」

爆音が炸裂する。

自分達の最大攻撃を打ち合ったため、それらの力にお互いの身体を押され強制的に距離を取らされた。

「ふん、自分の目的は相手には悟らせぬか。それもよからう。なら貴様の口から直接聞き出してやる」

「別に俺は嘘なんて」

ガン！！ と真横から神谷の頭に瓦礫が激突した。

あまりの速度での激突で瓦礫は一瞬で粉塵に変わり、二人の間に小さなカーテンを作り出す。

しかし、

「　　ついてないんだけどな」

神谷はそれを片手で撃ち落としていた。

手に付く埃を振り払い、神谷はミカエルの方へと言葉を放つ。

「秋川桜は渡さない。悪いけどあれは俺が飼ってる猫ちゃんだからね。他の人には貸出不可」

「そんな言葉では納得どころか、共感もできんわ」

ミカエルは目を細めながら、ロングソードを前に、小ぶりの剣を後ろにした特殊な構えを取る。

対し、プツ、と神谷は笑う。

諦めたような、楽しいようなそんな表情をしながら彼はこう言い切った。

「いいよ、別に。共感も納得もしてもらおうなんて思っていないから」

「共感や納得がなければ、大事な理解をも損ねるぞ？」

「理解してもらおうだなんて、思ったこともない」

「ふん。戦場で理解を望もうなどという考えを持たないのは正解だな。自分の目的に他人の理解を求めるといふのは、己の心に自信を持てん軟弱者することだ！！」

ソワリ、と神谷の背に悪寒が走る。己の第六感に従い少年は背を折りまげしゃがみ込む。

ミカエルが右手に持つロングソードを横薙ぎに振るった。斬ッ！！と何かを切断する音が紅き空間に炸裂した。

神谷の髪先端がはらりと落ちる。少年の後ろにある『もの』すべてが横に一閃され半分に分かれた。

草は切断され、木は両断され、瓦礫は寸断される。ミカエルが振るったロングソードの延長線上にあるもの全てが断絶した。

「魔剣モラルタに合わせた『空間断絶術式』……」

「ほう、知っているのか。ならば、『大怒』の意味を持つモラルタと対になるこの剣のことも知っているだろう」

ロングソード　魔剣モラルタを持つ右手と反対の左手に持つ剣を軽く掲げる。

手首のスナップで器用に回転させながら、ミカエルはゆっくりと笑みを広げる。

「『小怒』の意味を持つ名剣ベガルタ。どちらもフィアナの戦士デリアルミド・ウア・ドウヴネが携えた伝説の剣だよ」

ケルト民話に登場する英雄が持った二振りの剣、魔剣モラルタと名剣ベガルタ。

魔剣モラルタは一太刀であらゆるものを切断し、名剣ベガルタはモラルタほどの攻撃力はないにしろ両方共に『神の剣』と呼ばれる代物だ。

恐らくレプリカだろう。ただの人間が『神の剣』を制御できるとは思えない。

しかし、  
「いや、本物だよ」

ボコン、と魔剣モラルタの剣の柄から黒い気泡が出現した。

まるで、物質と物質が化学反応を起こしたかのような気泡はいくつも生じ膨らんで弾けるを繰り返す。

弾けた気泡から流れる黒い液体が刀身を伝い、白銀の刃が黒く塗

りつぶされていく。

剣の形状が変化した。

まっ黒な刃はその体積を上へ上へと伸ばし、ロングソードを信じられないほどの長剣へと姿を変えていく。

刀身五メートルほどの漆黒の長剣へと。

「魔剣モラルタ」

もう一度、言い聞かせるようにミカエルは口を開く。

「特性は切断。術式の色は破壊の『黒』。切断という役割においてこれを超えるものはないだろうな。そして」

五メートルもの長剣をミカエルは上から下に振りぬいた。

ゴボオン！！と刃の延長線上にあるものが全て両断される。

「『空間断絶術式』。たかが見えない刃を飛ばす魔術だが、モラルタとの相性は異常なまでに良くてな。使っているこっちが身震いするほどだ」

「ッ！！」

神谷はその続きを聞かなかった。

普通の人間が見れば、少年の動きは誰にも見えなかっただろう。

高速移動。それを体現するような速度で神谷はミカエルの元へと突撃した。

ガツキイイイイン！！と甲高い金属音が炸裂した。

ミカエルは五メートルほどの長剣で、神谷は金色の装飾がなされた槍で互いの攻撃を相殺する。

互いの武器の色は共に漆黒だ。

「人の説明は最後まで聞こうとは思わないのかね」

「いらないよ。必要ないからね」

「必要ない？　なら、その槍……ここに捨てに来たか」

バキーン！！と神谷の持つ槍に亀裂が入った。

神谷の表情がここにきて初めて驚愕に彩られる。

「驚くことはあるまい。モラルタの特性は『切断』だぞ。互いに打ち合って、そちらが無事に済む道理はなからう　ほら、何をも

たもたしている。そのままとお前も切断だ」

ズズズ、と神谷の槍にミカエルの漆黒の長剣が沈み込む。

そこで、ミカエルは刃を思い切り振りきった。

バッキイイイイン！！！！と割れたガラスを思わせる金属音を炸裂させながら漆黒の槍が砕け散った。

[illegible]

大きく響く笑い声に押し戻されるように神谷が後ろに飛び退いた。それを、ミカエルは追いはしない。

余裕があるのではない。決して油断しているわけでもない。

彼にとつてすでに相手との距離など関係ないのだ。モラルと『空間断絶術式』を組み合わせた彼の攻撃は、物理的な障害や距離という明確な差すらも無に等しいのだから。

「この学校で一番の成績といつても学生は学生だな。考えが甘いぞ、神谷拓海。こんな簡単なことにも気付かんとは……いや、お前が魔術を使えるのならカンニングでもしていたのか？ それなら貴様の信じられん成績にも合点がいくし、今のバカな行動も説明がつくというものだ」

手持無沙汰な様子で左手のベガルタを手首で回転させる。

「それで終わりか？　まだ私はベガルタを使用してすらおらんぞ」  
期待するような声音ではなかった。どうせもう何もできない、と  
分かりきった上での言葉だった。

確かに状況は神谷にとって絶望的だ。己の武器は大破し、使えるのは身体だけ。対し、クリストファーⅡミカエルは魔剣モラルタと名剣ベガルタを所有している。

しかも、名剣ベガルタに関してはまだ使ってすらいらないのだ。過

去の伝承からある程度の能力を予想できるものの、いまだに相手戦力は未知数だった。

勝ち目はない。もう、諦めるほかない。

客観的に見て、誰もがそう思っただろう。

しかし。

それでも、

「やっぱり悪趣味すぎるよ、先生」

それでも、神谷は口元の笑みすら浮かべてそう言ったのだった。

彼はまだ、理解していない。自分がどんな相手にケンカを売っているのかを理解していない。

秋川に手を出して、どれほど神谷を怒らせているかを理解していない。

ここから始まるのは、反撃ではない。ただの　　虐殺だ。

今回に出てきた魔剣モラルタと名剣ベガルタはケルト民話に出てくる伝承の剣ですね

途中、ミカエルが語っていた通り、フィアナの戦士ディアルミド・ウア・ドウヴネが携えていた二振りです

魔剣モラルタは一太刀で全てを両断するすっげえやつだったらしいですね

名前には『大怒』の意味があることから、凄まじい破壊力だったことが想像できますよ

そして、『小怒』の意味を持つ名剣ベガルタ

魔剣モラルタは長剣という記述がありましたが、ベガルタについては詳しい大きさが載ってなかったので、モラルタより少し小さいという設定にしました

ベガルタにつきましては………また後日解説できるかなあ…

んで、ここからが重要なんですけど

今作品で魔剣モラルタと名剣ベガルタが互いに対となる武器、という記述をしましたが

あれは嘘です

伝承上、その二つを両手に持ち、二刀流で相手を倒したという記述はないので、そこそこ勘違いしないように気をつけてください  
ね

## 第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

6 (前書き)

今回の一人称形式の書き方にはあまり自信がありません……

三人称ってやっぱり書きやすいなあ

この時、自分でもビクリするくらいに、私は冷静だった。

普通ならば、ここは叫び声を上げるか気を失うか発狂したりするのだろうが、私はまったく、ちゃんちゃらおかしいくらいに状況を分析できていた。

普通、だったらこうはならないのだろうか。

頭の中に溢れる、意味のわからない知識。昨日までの私は絶対に知らなかったはずの　そんな知識。

魔術。

それをつかさどる魔術師。

それらを統率する『教会』という名の組織。

それと敵対する墮<sup>エンジェル・ブローカー</sup>天人形。

それ以外にも、あまりに現実離れしすぎて笑ってしまいそうなものもたくさんあった。

普通なら、こうはならないのだろうか。

いや、普通ならこんな知識を持ったら夢か幻かと考えるのだろうか。

普通というと、ひろく世間一般に通ずることだと人は言う。

私も、そんな考えは否定しないし、その通りだと思う。というか、それ以外にどんな答えがあると言うのだろうか。

私は自分のことを『ちよつと男勝りな普通の女子高生』と自認しているのだから、ここで『普通』の根底を崩されても困るというものだ。

そもそも、自分のことを、普通でない、と自覚する人はある意味でそこらの人よりも『普通』という言葉の意味をきちんと知っているといてもいいだろう。

『普通』を知りえない人が『普通でない』等と言うのには無理があるだろう？

だと言っのなら、やはり私のこの知識は『普通』ではない。

自分の中の、一般的な知識というカテゴリーからかけ離れたこれらの知識は、どうやっても『普通』とは認められない。

一般的な知識といったふうに知識にだって色々ある。

専門的な知識に、豆知識。常識、というものですら知識というものに当て嵌めても多分にして間違いにはならないだろう。

だけど、その知識の中には二つに分かれる明確な区分がある。世に存在するものの『知識』と、世に存在しないはずの『知識』。

わかりやすく例えてみよう。

存在する『知識』は大統領。

存在しないはずの『知識』はドラゴン。

大統領は言わずとも、ドラゴンはほとんどの人が知っているであろう架空の生物の名前だ。

存在しないのにその存在を知っている。知っているが、それが存在しないと自覚している。

それはもうコインの裏と表のようなものだ。一枚のコインを投げた結果が、裏と表の両方になることは絶対にない。

両立することなど、ない。

明らかに矛盾した　　存在するはずの無い知識。

私の頭に溢れ出る知識は明らかにそれだろう。

異常。

普通ではない　　異常。

《『常闇の女王』》

と。

エンジェル・ブローカー

堕天人形の内の一体は私のことをそう呼んだ。

秋川桜、という本来の名前でなく、そんなよくわからない呼び方で私と言う異常をそう言い表したのだ。

《五年前の戦争　　天界戦争の裏切り者。裏切りに裏切りを重ねたアナタ様はまた再び覚醒なさり、世をどうするおつもりデスか？》  
何枚ものフィルターにかけたような不自然な声音でガイコツのよ

うな形をした人形がそう言って、一つしかない眼球をクリクリと回転させた。

スナイパーライフルのスコープのような、縦線と横線が垂直に交差する眼球が私を見据える。

「……………」

私は　沈黙した。

沈黙する以外に、選択肢がなかった。

わからないから。

何故か『常闇の女王』に関する知識は何一つないから。

そんなことを言われても　答えようがない。

「お前たちの目的は……………私なのか？」

広い運動場には私と墮天人形が二体。エンジェル・フローカーガイコツの方は地面に足を着けているが、赤ちゃん人形の方は宙にその巨体を浮かせていた。

この状況をどうにかするには、情報が足りなさすぎる。それ以前にどうにかできるかなどわかりはしないのだが、何もしないで後悔するよりマシだろう。

後悔先に立たず。

やれることは今の内にやっておきたい。

《やはり、自分の立場を自覚してはいないようデスね》

《バツカじゃん。まだ覚醒の始まり頃なんだからクイーン様の意識が表面化してるわけないでしししし》

濁った水晶のような無機質な瞳を私に向けて、嘲るように口を開くのは赤ちゃん人形。

所々に焦げた様なシミのある身体を揺らして、人形は宙を歩く。

《このままだと覚醒まで三十年かかるってのは、はたまたフザケタお話でししし》

《そんな時間を無為に過ごすのはさすがに嫌デスからね》

《マジな話だけど私たちはすでにクイーン無しでも生きてはイケるでししし。しかし、保険というか切り札というか、そんなものを主が欲しているというのが実際のところでししし》

《つまんない話デスね》

《つまんないけど、私たちが主の思い通りに動かなければ、私たちは私たちの存在理由をなくすでしし》

殺人兵器にして、天使を模して造られた『墮天人形』。  
エンジェル・ブローカー

その『墮天』の冠にふさわしい笑みを顔に、いや身体全体で表し人形はこちらを見据える。

《術式ハ？》

《完成まで残り一分ほどでしししし》

《へえ、そうデスカ》

それはもう、始める準備を済ませておくデス。

そして、白銀のガイコツが動いた。

ダランと下に垂らしていた腕を振り上げ、そこらの地面に勢いよく叩きつける、なんていう普通の人間がやったら骨が折れてしまいそうな行動。

実際、骨だけしかない状態でそんなことをすれば骨が折れるというか腕がなくなるといふか悲惨な結果になることは簡単に予想できた。

しかし。

しかしである。

私のそんな安易な考えは、容易に覆された。  
ズボリ、というなんともふぬけた音で白銀の腕が地面を貫通したのだ。

奇妙な不協和音を辺りに鳴り響かせながら、ガイコツの顔と眼球が勢いよく三六〇度回転する。

何度も何度も回転し続ける。

一つしかない眼球は、淡い黄色の光を灯し、開いた口からは金属光沢のある歯があらんばかりに己の存在を主張した。

目で見て、残像すら錯覚させる回転速度で首を回し。

両の白銀の腕を地面に突き刺したガイコツの動きが。

数一〇秒ほど繰り返し返されてから。

不意に 止まった。

《デビ、デシヨシソダリイ》

発せられた理解不能の言葉。私には何が何だかわからなかったが、何か意味があるのだろうか。

いや、あったのだらう。私には理解できなかったが、おそらく意味はあったのだ。

頭の中の『知識』が反応しないということは、魔術的な意味合いはないと思うけれど。

『常闇の女王<sup>クイーン</sup>』のように例外のものなのかもしれないが、私には何故かそれは一種のスイッチのように感じた。

電源のON・OFFを切り替える、電源スイッチ。

何かを開け閉めする時に押す、開閉スイッチ。

そして

”能力の発動の時に入れる、発動スイッチ”。

「!？」

それを合図するように、ガイコツの眼球の黄色い光が強く輝く出した。

と同時。

ゴッボオオオオオン!!!! と十本ほどの白銀の腕が私を中心として円形に飛び出した。

校舎と同じ程の長さのそれは天に向かって真つすぐと伸び、まるで古くからある柱のように威風堂々と直立している。

そして、最後に誰もが目を見張るであろう急激な変化があった。

ギユイイイン、と何かが擦れるような音と共に虹色の魔方陣が私の足元から広がり始めた。

鈍い光を発しながら広がる魔方陣は私を中心として直立する白銀

の腕に添うように。

つまり、私を魔方阵のと真ん中に配置するような形で発現する。

「こ、これは……っ!？」

その魔方阵を見て、私の中の『知識』が反応した。

術式、構成、色、記号。それらを眼で見て、一つの結果を弾きだす。

魔術、というカテゴリーの中に入るこれの効果は私にでも簡単に理解できるほどの単純明快なものだった。

能力増加。

どこかのRPGで聞いたことのあるようなそれがこの場に置いて意味するもの。

それは、続く赤ちゃん人形の言葉によって否応にして理解させられるものとなる。

《『精神汚染能力』。ちよつと頭が壊れるかもしれませんが、我慢してくださいでしししししし》

無機質な赤ちゃん人形の瞳に赤い光が薄く灯った。

それに呼応するように魔方阵の光が輝きを増す。

「……………あっ」

バリバリバリバリ!! と何かが破れるような音が流れると同時に、私の意識は遠く遠くに追いやられていくような感覚を覚えた。

覚醒が、始まる。

## 第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

6 (後書き)

こんなにも一人称がへたくそな自分には

一人称は合わないんだろうな

第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

6

2（前書き）

めっちゃ間隔あいた……

見てくれている人はいるのかな（笑）

「ああ……」

頭が痛い。

「あああ……」

身体が  
熱い。

「ああああ……」

視界が霞む。

「あああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああ！！！！！」

私が  
叫ぶ。

頭がグチャグチャにかき混ぜられるような感覚に襲われて私は思わず膝を地面についた。

頭を手で押さえ、あまりの痛みに目を閉じようとするが、私の両の眼はまるで私のものではないようにビクともせず、極限にまで見開き空を見つめた。

広がるのは、赤く紅く緋く染まる星空。

苦しいよ。痛いよ。辛いよ。そんな負の感情が私の中で渦巻き、せめぎ合う。

ギギギギギ、と何かが軋む音が聞こえた。

頭の中で断続的に響くそれは、ゆっくりとゆっくりと奥へ奥へと侵入していく。

「あああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ  
ああ………」

カチリ、と何かの歯車がかみ合った。

私の視界に物質の構成がすべて視覚化し、何もかもを理解できる

ようになつた。

[illegible]

いつの間にか私の叫びは笑い声へと変わっていた。しかし、そんなことは今の私には微塵の興味もない。

世界の真理が見えたのだ。

世界の真実が見えたのだ。

世界の構成が見えたのだ。

なんだこれ、気持ち悪い。

こんなもの、私は知りたくない！！

[illegible]

人の死が、視界に広がった。

過去の出来事が頭に広がった。

何もかもが私に広がった。

受け入れられない。受け入れたくない。

それらすべてが到底受け入れ難いものだった。

人が死ぬ。

しかし、私にはそれを理解することしかできない。

人が死ぬ。

しかし、私にはそれを見ることしかできない。

人が死ぬ。

しかし、私にはそれを受け入れることができない。

信じられるものか、受け入れることができるものか。

人の死をパラメーターで感じる私の現実を、受け入れられるはずがない！

[illegible]

消えてくれ！！

「は は は つ は は は は あ ひ は は つ は は は は は は あ は は ひ う  
は は は は は ! ! ! ! !」

頼むから……

「っははははっ あはははははひはははははあひひひ  
ははははははははははは！……！」

誰か……

[illegible]

誰かッ

「泣かないで、秋川。綺麗な顔が台無しだよ」

ズバチィ！！  
という炸裂音が辺りに鳴り響いた。

まばゆい光を放っていた魔方陣はその働きを止め、私を囲うように配置された白銀の腕が全て吹き飛ぶ。

全身から力が抜け、地面へと身体を落とそうとして、不意に誰かに抱きとめられた。

温かい。

人の体温がこれほどまでに安心できるなんてことを、私はこの時、初めて知った。

「もう大丈夫だから。泣かないで」

いつの間にか、私は涙を流していたらしい。

温かく、細い指が私の頬を撫でて涙を拭った。  
なぜだろう。

涙と一緒に不安まで拭われていく気がした。

「……………」

目を向けるとそこには大嫌いな男の顔があった。

変態ストーカーで変態宇宙人。優しげな微笑をこちらに向けてソイツは私の髪にそつと触れた。

「まったく心配かけて……泣き顔が似合わないとは言わないけど、やっぱり秋川には笑顔が良いと思うよ」

珍しいなあ。

コイツが冷や汗をかいてるところなんて……初めて見た。

「これで俺に貸し一つだね。いつか何でも一つだけお願いを聞いてくれたら、ちゃらにしてあげるよ。そうだな、一日だけメイド服着て俺のメイドになつてよ」

ム力つくなあ。

そんなこと誰がするかよ、この変態野郎め。

やっぱり、私はお前のことが

「……………」大っ嫌いだ」

「ハハッ、手痛いなあ。ホント、秋川には敵わないや」

大丈夫、とソイツは私の頭を撫でながら、小さくつぶやいた。

「明日の朝には、いつも通りだから。安心して眠って」

私の意識はそこで途切れた。

最後に見たのは、私に顔を近づけてくるソイツの悲しそうな、泣きそうな表情だった。

少年は、秋川桜の髪に触れるだけのキスをしてからゆっくりと彼女を地面に寝かせた。

髪の毛に砂がついたらどうか少し思ったりしたが、こんなとき

に気にするようなことじゃない。

今この瞬間、少年            神谷拓海は非常にムシの居所が悪かった。

「……………」

髪を撫でてから神谷はゆっくりと立ち上がり、

ガゴン！！            と死角から突っ込んできた赤ちゃん人形を回し蹴りで迎撃した。

《ご、オア…………》

神谷の蹴りを受けて人形が巨体をあらんばかりに回転させながら地面を転がった。

ゴッギイ、という鈍い音はいくつかのネジが外れた音かもしれない。

数回バウンドする人形は、校舎の端にある樹木に激突してからようやくその勢いを止める。

神谷はそれを冷めた表情で見つめて、小さく目を細めた。

「悪いけど今、すっごいム力ついてるから。ウサ晴らし、させてもらうよ」

《こ、の…………魔術師風情が…………私の邪魔をするなんて百年早いでししししししし！！》

ギリギリギリ、と糸を無理やり引くような音を響かせながら人形は起き上がった。

瞳に灯る淡い赤の光が、異様な明滅を繰り返す。

《貴様が邪魔することがどれほどの意味を持つと思っているでし。

『教会』にすら所属していない貴様が私たちの邪魔をして、そう簡単に生き延びられると思ったら大間違いでし》

「知らなし、興味もないよ。正直な話、俺はアンタらの計画なんてどうでもいいんだよね」

《どうでもいい？　でししし、どうでもいいとはまた……ひひひひ　殺す》

ぐにやり、と神谷の周りの空間が歪んだ。

地面と空がくつつくような異常な感覚を覚えるような光景の中で赤ちゃん人形の瞳に淡く赤い光が灯る。

魔術ではない。

エンジェル・ブローカー

『墮天人形』がそう呼ばれたるゆえんである、神能力からの贈り物。個体の一つ一つが別々の能力を持つ人形は、常識を超える。

個体の一つ一つが別々の能力を持つ人形は、常識を超える。

《でしししししししししししししししし！！！》　回  
避不可能に、防御不可。私の精神汚染能力は、貴様の脳を完全に破  
壊する！《

笑う口の中に、サメのような牙が覗く。

ぐちゃぐちゃに絵具を混ぜたような背景は、強制的に吐き気を感じさせるものだった。

平衡感覚を保てる環境ではない。通常の思考を保てる状況ではない。人が生きていける場所でもない。

そこらへんの人間なら、三秒も生きてられないだろう。あまりにも強力な幻覚は、人間の頭を簡単に腐敗させる。

魔術師であれ、なんであろうとも関係ない。この能力は無敵である、と人形は思っていた。

しかし、神谷拓海はほんの少しだけ眉をひそめながらこう言ったのだ。

「藝陶しい」

ドス、と鈍い音がした。

⌋  
?  
⌋

最初、人形はその音が何だかわからなかった。奇妙な音だった。何かが硬い何かを貫いたかのような、不思議な音だった。

音源を見る。音が聞こえた自分の下の方に目を向けて驚愕した。

なぜなら。

《……え？》

自分の身体に漆黒の槍が突き刺さっていた。

《バカな……いつの間に》

ゴフツ、と人形の口から血が漏れた。赤く光った瞳の色は輝きをなくし、血走った眼が不規則に揺れる。

パキン、と金属音が鳴った。

それは、漆黒の槍が『エンジェル・ブローカー堕天人形』の力の核である『結晶』を粉碎した音だった。

直後。

ボツガアアアアアン！！！！と轟音を炸裂させ、赤ちゃん人形が大破、炎上した。

校舎に勢いのよい風が吹き、人形から五十メートルほど離れていた場所に立つ神谷の髪を撫でる。

彼は色素の薄い瞳を後ろに居る最後の『エンジェル・ブローカー堕天人形』の方へと向け、  
呟く。

「あと一体」

その感情を押し殺したような低い声は運動場へと静かに鳴り響いた。

第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

6

2（後書き）

ちよつと納得できない今回の出来

すごく不満です（苦笑）

7

《ぎひひ》

神谷拓海が己の仲間を瞬殺したのを見たガイコツは、思わず口から声を出して笑っていた。

《ぎひひひひひひひひひひひひひひひひ！　どおやらそこの魔術師ではないようデスねー。》情報”によると、アナタは『教会』にも所属していないらしいじゃないデスカ。魔術の総本山にも所属していないアナタにそこまでの戦闘力があるとは、予想外デしたよ。その情報とは、事前に調べられたものではない。

『墮天人形』は、半径一〇キロ程度の範囲ならば個体同士で情報を共有できる機能がある。

その場での助言や、援助などは出来ないが、戦闘相手の武器や能力などの情報を直接戦わずとも複数の仲間へと伝達できるのである。

《神谷さん……神谷、拓海さん？　ぎひ……アナタ随分才強いようデスね。今回は『エンジェル・ブローカー墮天人形』を三十体も用意した大規模作戦だったデスが、まさかアナタ一人にすべてをひっくり返されるとは思ってたませんデした》

そのため、少年の情報は少なからずガイコツ人形の方へ入っている。

神谷拓海が、自分を除く全ての**堕三**天人形を一人で破壊したこと。

神谷拓海が、秋川桜へ異常な執着を見せること。

神谷拓海が、自分では太刀打ちできないほどの化け物だということ。

《ぎひひ》

だ  
が。

それでも、相手の戦力と己の戦力を鑑みて、人形は思わず笑みを

浮かべる。

《ミカエル様はどうしました？ 確かアナタと戦闘していたはずデスが……》

「知らないよ。そこらへんに転がってるんじゃない？」

冷やかな微笑を顔に張り付けて、神谷拓海がこちらの方へと身体を向けた。

首元のネクタイを鬱陶しそうに緩め、足を踏み出す。

「もうアンタで終わりだよ。めんどくさいのは嫌だから、あんまり抵抗してほしくないんだけど」

そう言って目を細める神谷に、エンジェル・ブローカー堕天人形は余裕の表情を見せた。

絶対的な戦力差だと言うのに、ガイコツは不敵に笑う。

《ええ、抵抗はしません。悪あがきは嫌いデス。信条に反しますから》

デスので、とガイコツ人形は言葉を切った。

肩越しに後ろをちらりと見る。広い運動場の中に自分と神谷拓海しかいないのを確認する。

”すべての準備が整ったことを理解して”ガイコツは最後の手段を行使した。

《今回は、逃げさせてもらいましょう》

キユウウ、とガイコツの足元に奇妙な魔方陣が現れた。

黄色に輝くそれは、六芒星の中に一つの五芒星という不思議な形で、普通の魔術師の使えるものとは異なっているものだった。

エンジェル・ブローカー『堕天人形』の印ともいえるもの。それこそが、エンジェル・ブローカー『堕天人形』であるという証拠である。

《『空間転移能力』。長距離を移動する力を溜めるには少々時間がかかりますが、その準備もたった今、この瞬間整いました》

ガイコツ人形の、縦線と横線が直角に交差する瞳の中心に、淡く黄色い光が灯る。

徐々に輝きを増す魔方陣の光の中心で、エンジェル・ブローカー堕天人形が薄く笑った。  
《残念デしたね。こちらは勝てやしません、負けもしません。ア

ナタの情報を土産にすれば、主も今回の失敗をお許しになるでしょう」

それは、今回失敗したとしても次がある、と言外に言っているようなものだ。

今日負けたことを反省し、次に活かす。さっきの赤ちゃん人形のように怒りに身を任せて格上にケンカを売るのは愚の骨頂である。

勝てなければ逃げる。

その考えは、前線で戦う『尖兵』として一番ベストなものだった。《さようなら、神谷拓海さん。すぐに帰ってくると思うのデ、首を洗って待つておくことデス》

バカにするように、嘲笑うかのようにそう言っただけで、人形は天を仰いだ。

そして、魔方阵の輝きが一層に増す。人形の能力が発動し、『空間転移』が開始される。

だが、ここでガイコツ人形は一つミスをした。

それは、逃げるという行為を取ったことではない。

それは、逃げるということを神谷に宣言したことでもない。

それは、『空間転移能力』を使えば逃げられる、と思ったことである。

「逃がすと思っただけ？」

その言葉は、何故か真横から聞こえてきた。

直後。

ゴッガアアアアン！！ とありえない音を炸裂させて、神谷拓海がガイコツ人形の頭を鷲掴みし、地面へと叩きつけた。

唐突のことに能力が中断させられ、ガイコツの口から思わず声が

漏れる。

《オ……がア？》

「言ったでしょ、『ウサ晴らしさせてもらっ』って。俺の”秋川に手を出しておいてただで済むと思ったなら大間違いだよ」

ミシイ、と人形の頭に亀裂が入った。色素の薄い瞳が冷やかな視線をこちらに向ける。

《ば、バカな……むちゃくちゃ過ぎる……ッ！！》

「そんな外見してるヤツにむちゃくちゃだなんて言われたくないな……」

そんなことを言っているんじゃない、とガイコツ人形は思わず叫びそうになった。

むちゃくちゃなのは神谷の動きの方だ。

恐らくまっすぐこちらに近づいてきて地面に叩きつけたのだろうが、人形にはその動きがまったく見えなかった。

見えなかった。

そう、見えなかったのだ。

光の速度を超えている。

人間の限界を、超えている。

《こ、の……化け物め！！》

シュン、と風を切るような音が響き、人形の姿が神谷の前から消えた。

『空間転移能力』。

長い距離を移動するのには準備に時間がかかるこの能力だが、短い距離の移動ならばそれほど力を溜める必要はない。

一度体勢を立て直すために、人形は神谷から五〇メートルほど離れた場所へと移動した。

しかし。

「何度も言わせないでよ」

ズバン！！ とそこに狙いを定めたように投擲された何かに、白銀の腕が両断された。

爆散する腕の音と重なるように人形の叫びが運動場に轟く。

《あがああああああああああ！！！！》

「逃がさない」

バチン！！ と神谷の手から火花が散った。

まさに圧倒的。

いや、絶対的と言っていいだろう。

使っているのが、魔術なのかそれ以外のなにかかもわからない。  
事前の情報もクソもあったもんじゃない。

もし逃げれたとしても、ここまでの戦力差など想像もしていなかった。

これではまるで

《……………まるデ……………まさか……………そんな、バカな》

そこで、エンジェル・ブローカー堕天人形はあることを思い出していた。

五年前の魔術師と堕天人形の大規模戦争、天界戦争のことを。

『クイーン常闇の女王』の裏切りにより決着がつかなかったあの戦争を。  
そこで見た、あの少年を

《バカな、貴様は五年前に……………死んだはずじゃ》

「……………」

人形の目の前に、神谷が立つ。

色素の薄い瞳に、少し茶の入った髪。

五年前の少年の情報と照らし合わせると似通う点がいくつもある。

《生きていた？　ぎひひ、間違いない……………貴様っ》

人形の喉が急激に干上がる。

《オディユス始まりの……………》

それは、死んだはずの名前だった。

それは、忘れられない名前だった。

それは、信じられない名前だった。

《キインキニセイオレスティス魔法使いッ！！！！！！！！》

直後、ガイコツ人形の力の源である『結晶』に、漆黒の槍が突き刺さった。

人形の中の力が外に解放され、大きな爆発が生じた。

ゴッガアアアアン！！ という爆音が運動場へと叩きつけられる。

その爆心地の中心。髪と服を爆風に揺らされる神谷拓海は、天を仰ぐ。

固有結界『紅月<sup>あかつき</sup>』が解ける。

紅く染まっていた星空が、元の色へと戻っていく。夕暮れの空も、部活動生の声も、壊れた校舎も、傷だらけの運動場もすべて元通りになっていった。

風が吹く。

完全に元通りとなった運動場には、すでに神谷拓海と秋川桜の姿は消えていた。

それはもう、幻想のように、こつぜんと。

## 第一章「紅き月下の元、黒猫は歩く」

7（後書き）

第一章終了!!

物語も四分の一を消費しました

これからも遅筆ながらに頑張って書くので、よろしくおねがいしますね!!

## 「行間1」

目が覚めると、そこは自宅のベッドの上だった。  
小さな部屋だった。

高校二年という青春まつ盛さりの少女の部屋とは思えないほど、  
シックというか質素な部屋である。

悪く言うなら地味と言ってもいい。

「……………」

上半身を起こし、少女            秋川桜はカーテンもかかっていない  
部屋の窓から外を見る。

いつの間にか夜になっていたのだろうか。  
見えたのは満月。

窓の中央に居座るような満月は大きく、丸く、幻想的な風景だ。

「……………頭、痛い」

ゆっくりとした動作で頭を押さえる。

彼女の耳に届くのは、近所の子供の声と、よくわからない虫の鳴  
き声だけ。

その音源があるであろう外はすでに夜の営みを始め、空の星は満  
天に輝いている。

「あら桜、もう起きてても平気なの？」

少女に声がかかる。

声のした方に目をやると、見慣れた顔が開いた部屋の扉から覗い  
ていた。

秋川なぎさ。秋川桜の母親である。

彼女は心配そうに眉をひそめ、ゆっくりとした動作で部屋へと入  
ってくる。

「学校で倒れたって話だけど、大丈夫？」

「うん、大丈夫。心配するほどじゃないから」

「そう……………あ、そうそう。明日きちんとお礼言っときなさいね」

お礼？ と秋川が首を傾げる。

そんな娘に微笑を向けながら、なぎさは頬に手をあてて『あらあら』というような微笑ましい表情を向けた。

「桜をウチまで届けてくれたあの子よ。結構カッコよかったじゃない」

「届けて？ それってどういう……というか私、どうやって学校から帰ったんだっけ」

「あらあらあららー。またまたとぼけちゃって、どこであんなイケメンを引っ掛けてきたの？」

引っ掛ける……？ と、もう使われていない言葉（一般的に『死語』と呼ばれる）にクエスチョンマークを頭の上に浮かべ、秋川は目をつむる。

思いだすような動作をして、一度、二度、三度と首を捻った。

「それにイケメンって……ごめん、本当にわからないんだけど」

「そっか……まあいいわ」

そう呟き、なぎさは秋川の頭を手で引き寄せ、娘の額と自分の額とを合わせた。

通じる体温。おそらく体温を測っているのだろぅと考える秋川は、その動作を振り払ったりはしなかった。

「うん、やっぱり少し熱があるわね。日頃の頑張りが顔を出したんでしょう」

「誤魔化さないでよ母さん。イケメンってなに？ というか、さっき勢いで大丈夫とか言っちゃったけど、私は学校で倒れたの？」

「あらあら、まさか覚えてないってことでうやむやにするつもりなのかしら」

そ、そんなんじゃないよ、と秋川はふるふると顔を横に振る。

慌てる娘の表情を見てなぎさはクスクスと笑った。膝を折り、視線を秋川と合わせて気軽に話を続ける。

「ほら、神谷拓海くんよ。桜のカレなんでしょ？」

「神谷って……ち、違う！ 違います！ あ、アイツが私のか、か

かカレのわけないっ」

「ええー。お父さん泣いて喜んでたのに」

「喜ばないでよ！ ていうか、泣いたの！？」

「母さん、泣き笑いなんてものを生まれて初めて見たわ」

え、ちよつと見てみたいな、それ…… と呟く秋川の頭をポンとなぎさの手が置かれた。

びくつ、と揺れる娘の頭を軽く撫でる。

日頃からそこまで手入れされていないはずの秋川桜の髪の毛はビツクリするほどサラサラで、一人の女性として何か想うところがあるのだろうか、なぎさはひっそりと苦笑した。

「今日はもう休みなさい。夏休みまであと一週間なんだから、もう少しの努力よ」

「…………… ねえ、母さん」

「ん？」

「もし、私が自分のことがわからなくなってしまったら、どうすればいいのかな？」

「……………」

「……………」

「…………… ごめん、私、頭弱いからわかりやすく言ってくれないかしら」

「…………… そうだよね」

わかるはず、ないんだ。

そう言つて秋川は窓の外を見た。枕元にある時計を手にとって、月明かりを頼りにアラームの時間をセットする。

小さな頃から使っているせい、その時計だけが妙に子供っぽくて、月明かりに照らされたせいで余計に際立つたようにも見えた。

「ごめんね母さん、心配かけて。母さんの言う通り、明日こそ倒れないように今日は早く寝るよ」

「…………… あまり、無茶しちゃダメよ」

「うん…………… わかつてる。おやすみなさい」

「……おやすみなさい」

と、なぎさはもう一度秋川の頭を撫でて腰を上げた。

秋川に背を向けて、部屋を出ようとして。

「ねえ、桜」

首だけを回し、肩越しに自分の娘を見る。

ドアノブに手を掛けながら、独り言のように呟いた。

「自分がわからなくなったら、過去を振り返るか、今を見なさい。そうすればきっと答えが見つかるはずだわ」

ぱたん、とドアを閉めてなぎさの姿が部屋から消えた。

部屋に残ったのは秋川と、よくわからない虫の鳴き声だけ。

「……………」

秋川は数秒ほど行動を停止させ、その後ゆっくりとベッドに倒れた。

枕に頭を預けながら、カーテンもしていない窓に映る月に手を伸ばす。

『大丈夫』。

つー、と頬に何か冷たいものが伝った。

『明日の朝には、いつも通りだから。安心して眠って』

腕を目にあて、涙を拭いながら、秋川は奥歯を噛みしめる。

「ダメだよ神谷。眠れない。眠れるわけ、忘れられるわけ、ないんだ」

V a s ? l i s s a t o u S k ? t o u s e ? n a i p  
? n t a。

頭に浮かぶ、その言葉。

その言葉の意味を秋川は知っている。

V a s ? l i s s a t o u S k ? t o u s e ? n a i p

バシリッサートウスコトウスエイナイバンタ  
? n t a。

その言葉を訳すと、出てくるものは一つの単語だった。

クイン  
常闇の女王。

その言葉の意味を”覚えている”のだ。

神谷拓海の望みとは裏腹に。

## 第二章「黒猫と蜘蛛は、緑の世界で踊り狂う」

0

「Foreseeable Future」

「頼むよ神谷、私はお前を殺したくはないんだ」  
そう言って、彼女は手に力を込めた。

「Side Akikawa」

「いいですわー。そうこなくては。お迎えの待ちぼうけくるってヒマ思ってたウチにはぴったりのお相手ですえー」  
そう言って、彼女は刀を抜いた。

「Side Unknown??」

「邪魔……っ!!」  
そう言って、彼は漆黒の槍を振るった。

「Side Kamiya」

「……その程度かい、始まりの魔法使い。キミにはガッカリだ」  
そう言って、彼は高く飛びあがった。

]Side  
Unknown?  
??.?  
[?]

## 第二章「黒猫と蜘蛛は、緑の世界で踊り狂う」

0（後書き）

さて、とうとう始まりました第二章

「黒猫と蜘蛛は、緑の世界で踊り狂う」という意味深なタイトルです  
ね

これにもきちんと意味があるので、これから読んだときに考えて  
みるとおもしろいかもしれません

ちなみに第一章の「紅き月下の下、黒猫は歩く」のように『黒猫』  
を神谷拓海において、

第一章の流れを大まかに表しています

では、今回の『蜘蛛』とは誰なのかッ

そして、今回から導入しました「Foreseeable Future」

直訳で『近い未来』ですね

つまり、軽い次回予告っていうか、第二章全体予告です

これから章の始まりに書いていくことになると思います

あ、しかしこの予告内容

……もしかしたら変更になるかもしれない

とくに「Side Unknown??」が

もろ新キャラ

つか、今思いついた

すでに決めているラストに邪魔になりそうだったら、削除するかも

.....

まあ、いいか

次回からバトルだよ

ギャグパートって、なんだあ？ ブロリー

そんなものを俺が書けると思っているのか？ ぶろり

もし書けたとて、これ以上の作品はできぬう！！ ぶろり

1

金曜日の放課後である。

すでに週の終わりの空気が漂いつつある清林高校の屋上に神谷拓海はいつものように座っていた。

彼の横には手提げバック。

彼の眼前に広がるのは、校舎の前に広がる運動場である。

昨日あんなことがあったというのに、何も知らない生徒たちはいつものように部活動にいそしみ、いつものように勉強や遊びなどで自分の生活を営んでいた。

それもそのはず。

エンジェル・ブローカー

墮天人形が使う固有結界『（あかつき）紅月』は完全に普通の世界から隔離されている。

あかつき

『紅月』の発動を知覚できるのは、魔術師と墮天人形のみ。

エンジェル・ブローカー

魔力の流れを読めない一般人にコレを知覚することはできない。

エンジェル・ブローカー

それゆえに、今まで墮天人形という人類の最大の失敗殺人兵器が世界に知れ渡らなかつたのである。

一般人にはわからない、という事実。それは昨日のことも例外ではないのだ。

それでいい、と神谷は思う。

そんなことを知ってもたらされるものに良いものなど一つもない。

人間の一欠けら

エンジェル・ブローカー

すなわち少しのDNA情報だけでその姿形をマネできる墮天人形は一般人にとってかなりの恐怖になるだろう。その恐怖は、『目の前に居る友達は友達の姿をした”なにか”かもしれない』、という疑心暗鬼を呼ぶ。

誰もが人間不信または情緒不安定な学校など、通ってもなんの楽

しみもない。

『教会』の中では世界に魔術の存在をバラそうという派閥があるようだが、ほとんどの魔術師は『秘匿』を望んでいるのだ。そう。

そんなことを考えてしまう事もいつも通り。

しかし、神谷拓海にとって今、この瞬間は、『いつも通り』ではなかった。

いや違う。

正確には今日の朝からだろうか。

いつもは学校の校門前で挨拶運動をしている会長がその場にいないのが少し気になりながらも、いつも通り遅刻ギリギリで学校に登校したときのことである。

靴箱を開くと、そこには見慣れたものが置いてあった。

便箋が入っているであろう封筒がハートマークのシールで綴じられている。いわゆるラブレターだろう。

ラブレターを貰った。

内容はあるきたりな文章で、簡単に言うと放課後に屋上に来てほしいとのことだった。

またか、という感じ。

いつものことで、対して反応を示すようなことじゃない。

「……………え？」

確かに、周りからしてみればそうだろう。

しかし、神谷拓海にとってそのラブレターは到底信じられるようなものではなかったのだ。

差出人。

秋川桜。

どうしよう名前後にハートマークが付いているかわいい。

「……………」

そんなことを思ってしまう自分はもうダメなのかもしれない。

学校の屋上で朝の出来事を思い出し、不意にそう思った。

手提げバックの中から、その手紙を取り出し（前のときのようにぐちゃぐちゃにするのでなく、かなり丁寧な扱いである）その文面をもう一度見る。

「……………まったく、こんなに歪なハートマーク初めて見た」  
思わず苦笑する。

よほど無理してハートマークを描いたのだろう。線対称であるはずのマークが、ただの変な形をした丸みだいになっている。

これではただの記号だ。

「……………」

実際のところ、この手紙の目的が『告白』ではないだろうと思う。自分で言うのもなんだが、神谷拓海を秋川桜に惚れさせるにはまだ時間やら好感度やらが足りないのだ。

「昨日のこと……………かなあ」

そんなはずはない、と思いながらもそれ以外に思い当たる理由はない。

ただ話すだけならともかく、呼び出される理由が、  
ということとは。

秋川桜は、昨日の出来事を　覚えていたのだろうか？  
しかし、そんなことがあるはずがないのだ。

神谷拓海自身が、秋川桜の昨日の記憶を消したのだから。  
消した、と言っても脳を傷つけないように『その記憶を曖昧なものにする』ような簡単な処理である。

昨日何かあったことは覚えているけど、”何が”あったかを曖昧にする。

プロの魔術師ならば、適当な障壁に阻まれるであろう魔術だが、  
運良く秋川は魔術師ではない。

神谷の魔術を無効化することなどできるはずがない。

そう、だから大丈夫。

神谷は必死に、自分に言い聞かせるようにそう呟く。

秋川桜には何も起きていない。

だから大丈夫。心配することはない。

今日の呼び出しだって、きっと大した用じゃない。昨日秋川の家  
に彼女をおぶって行ったことに文句を言われたり、もしくは感謝の  
言葉をくれたり、どちらとも違うかもしれない。

大丈夫。

神谷拓海の望んだとおり、秋川桜は普通の女子高生でいるはずだ  
から。

「すまん、待たせたな」

そんな少年の願いを叶えるかのように、神谷の背中に当たり前の  
ように秋川の声がかけられた。

いつも通りの、はきはきとした声だった。昨日に何かがあったこ  
とを感じさせない、普通の声だった。

大丈夫。

やっぱり彼女に異変はない。

だから、後は自分がいつも通り軽口を叩いて振り返れば日常は始  
まるはずだ。

「いいよ、気にしなくて。会長の方から呼び出してくれるなんて初  
めてだからね。ちょっと、舞い上がって早く来ただけだし」

後ろを振り向くと、清林高校の制服に身を包む秋川が、屋上の入  
り口のドアを後ろ手で閉めているところだった。

ボタン、と鈍い金属音を響かせるドアを背に、秋川は屋上に吹く  
勢いのある風で一瞬だけ動きを止め、神谷の方へと歩き始めた。

「本当にすまない。すぐに済ませなくちゃならない仕事がいっきに  
押し寄せてきてな、ちょっとばかり時間をくった」

「へえ……珍しいね、予定にない仕事なんて。夏休み前だってい  
うのに、会長は相変わらずだ」

仕事、というのは十中八九生徒会のものだろう。いわく、今日中  
に済ませなくてはならないことを今日依頼されたせいで待ち合わせ  
に遅れたのだと。

秋川はほんとうに申し訳なさそうに、神谷に謝罪の言葉をのべた。

本当の仕事場ではあるまいし、生徒会にそんな急に仕事が入るとは思えないのだが、近日に行われた秋川による『学校改革』で無理したツケでも払っているのかもしれない。

学校改革という、本来ならば時間をかけてゆつくりとやっていくべきことを数ヶ月でやった結果、今の生徒会が多忙になっていることは学校では有名な話である。

「で、その仕事はきちんと終わったの？」

「もちろんだ。誰も文句が言えないほど完璧に終わらせてきた」

「わお……さすがは会長、仕事がはやいね」

「ちやかすな。お前との約束に遅れたことには変わらない」

気にしなくていいのに、と神谷は苦笑する。

「そついえば、初めてだね。会長と俺の二人で屋上に来るの。この前まで校則違反はしたくないとか言って絶対に一緒に来てくれなかったのに」

「当たり前だ。私が校則を破るのは、お前が校則を破るのは違うんだよ。私は会長なんだ」

「生徒の手本となるかいちょー様だもんね。あきちゃんったらかつ

こいー」

「だまれ」

「でも、いいの？　今ここにいる時点で校則を破っちゃってるわけだけど」

「ああ、それなら大丈夫だ。先生に特別今日だけ屋上を使う許可はもらってる」

「えー。かいちょーそれって職権乱用じゃないのー？」

「……………そうかも、な」

会話を切り上げるかのように、秋川は神谷の横を無言で通り屋上の端まで歩いた。

足から脛程度の高さしかない壁スネ（そもそも壁と呼んでいいのかわからない）以外には落下防止のフェンスすらないそこから学校より外を秋川は眺める。

「なあ、神谷」

不意に。

そう、秋川は隣まで歩いてきた少年に向かって話を切り出した。

「あそこにある廃屋、見えるだろ」

屋上から見えるビルのような、大きな廃屋を指差して、

「あそこで数日前、変死体が見つかったらしいんだ。知ってるか？」

「知ってるよ。なんでも『死因がわからない死体』なんだって。今のところ検死のミスっていう話らしいけど……」

唐突な話題の転換に戸惑うことなく、神谷は昨日のテレビで偶然見たニュースの知識を口にする。

神谷の言葉に、秋川は頷いた。

「ああ、そうらしいな。他殺か、自殺かも、わからないそうだ」

不思議な話だよな、と少女は平坦な声で呟いた。

そんな秋川を横目で見ながら、神谷は一人、怪訝そうに眉をひそめる。

目の前の少女はいつたい何を言いたいのだろうか？

「……会長、まず確認しておきたいんだけど、この手紙を俺に送ったのは会長でいいんだよね？」

「名前、書いてあっただろ？」

ひらひらと振られる手紙から目を逸らすようにして、秋川は答えた。

封筒に書いてある『From秋川桜』という字をもう一度見て、

神谷は手紙をズボンのポケットの中へと納める。

「で、わざわざ呼び出してまで秋川は俺になんの用なの」

「は？ ……お前、手紙はちゃんと読んだのか？」

「読んだけど……言いたいことがあるって書いてあるだけで肝心の内容がなかったよ」

「えっ……いやいや嘘つけ！ 私はちゃんと書いたはずだぞ！！」

「えー、ウソダー」

凄まじい速度で顔を俯かせ、書いたよな、書いただろ、書いてる

はずだ！！　と独り言を呟きながら少女は目まぐるしく表情を変化させる。

そんな秋川の焦りようを見て神谷はクスクスと笑った。  
その時だった。

「意外だな、気づかないのか……神谷」

後ろから、そんな声が聞こえた。

一瞬、それが誰の声なのか神谷拓海にはわからなかった。

この屋上には秋川桜と自分以外には誰もいないはずだ。

秋川は神谷の前にいる。だというのに、その声は後ろから聞こえてきた。

”秋川桜の声が後ろから聞こえてきた”。  
同時。

神谷拓海の首筋に一本の刃が突きつけられた。

それは日本刀だった。しなやかに反った刀身は鈍く輝き、七〇センチもの刃の先には金色の鐔<sup>つば</sup>。

紅い柄を握る手は適度に力を抜いており、使い慣れていることが一目でわかる。

清林高校の制服で、肩まである黒髪に勝気な瞳。折り目正しく、規律正しいが似合うこの少女の名前を神谷拓海は知っていた。

「あ、……き……」

「動くな」

ピタリと、日本刀の刃を少年の喉筋に当てて少女　秋川桜は  
冷徹に言い放った。

「少しでも動けば、すぐに首をはねる」

## 第二章「黒猫と蜘蛛は、緑の世界で踊り狂う」

1 (後書き)

急展開ワロタwwwwww

って感じですよホント(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2391n/>

---

桜の散る夜に

2010年11月29日19時11分発行